

特 254

731

NOUVEAUX COURS DES RELIGIONS JAPONAISES

會教トステプバ本日

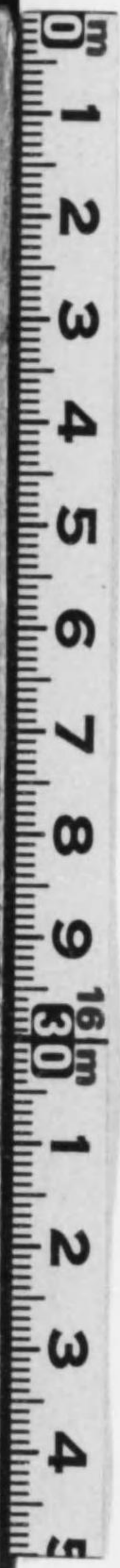
郎五勇葉千

班一軍世救

平軍室山



院書方東



始



特254  
731

日本バプテスト教會

千葉勇五郎

目次

概説 精神的基督教の擁護……………一

一 神と人との直接的な關係……………二

二 信條よりも生活……………三

三 教權主義の打破……………六

四 教會禮典の表徴主義……………七

五 教會の成員——自由意志の發露……………二

六 教會のデモクラシー……………三

七 政治と宗教との絶對的分離……………五

八 バプテストの名稱の起源……………八

九 詢教者の血に培はれたバプテスト……………九

十 バプテストと海外傳道……………一〇

十一 世界に於けるバプテストの現勢……………一七

十二 我日本に於けるバプテストの過去現在……………二〇

(一) 前驅者ゴープル氏——(二) 日本最初のバプテスト教會——(三) 東京第一バプテ

二  
スト教會の創立——(四)地方に於けるバプテスト教會の勃興——(五)アイヌ人傳道の爲め渡來せるカーヘンター氏——(六)瀬戸内海の傳道……福音丸——(七)米國南部バプテスト外國傳道會社の日本傳道

## 日本バプテスト教會の主義主張

千葉勇五郎

### 概説 精神的基督教の擁護

バプテスト教會は古來精神的基督教を擁立し、あらゆる迫害と戦ひつゝ今日に至つた基督教會の一團體であつて、當今全世界に亘り五萬六千の教會と壹千壹百萬人の信徒を有する基督教新教の一大教派である。

イエスの單純な精神的宗教は信徒の數を増加し、年代を重ねるに従ひ漸次形式化し、同時に異教の風習に侵され、本來の清新なる生命が稍もすれば喪はれんとした。殊に此傾向は紀元三百十三年コンスタンチン大帝の利用する所となり、キリスト教がロマ帝國の國教と定めらるに及んで益甚だしく、遂にロマ法皇の專横と教會の頽廢とは中世紀の信仰的暗黒時代を觀るに至つた。此時弊を憂慮し、形式的宗教に對して精神的宗教を主張し、僧侶主義に對して萬人僧侶主義を叫び、信條主義の束縛を脱して自由研究を説き、政治と宗教との絶對的分離を唱道し、良心の自由、教會内政のデモクラシーを高調したのはバプテストの先驅者等であつた。爾來バプテストの主張は、時勢の推移と、國情の相違と、宗教眞理體得の程度の如何に由つて、多少の變遷は免れなかつたとは云へ、大體に於て、一貫せる主義主張を持して今日に及んでゐる。左に述べんとするものは單に我日本バプテストの主義と言ふよりも、世界バプテスト共通のものと言ふべきものである。

## 一 神と人との直接な關係

宗教は本來、神と人との關係、即ち神の心靈と人の精神との直接關係の上に其基礎を置くものである。此兩者間の關係の密接なる所、純真なる所、神聖なる所に宗教の生命が存する。宗教の頽廢するは此兩者の間に侵入し來る障害——國家であるか、法王であるか、僧侶であるか、形式であるか、傳統であるか——に由る事が多い。精神界に於ける人格的單位は民族や種族や家族ではない、實に一個々々の人間である。殊に基督教の見解によれば、個人の人格程貴重にして尊嚴なるものはない、全世界の富と雖も之に比較する事は能きない。此尊い人格たる人間の魂と神の靈との直接な交渉は最も神聖なものであつて、何物も、何人も之を侵すべきものではない。

第一に之は精神的な關係である。つまり人為的な、物質的な關係ではない。「神は靈なれば之を拜する者も亦靈と眞實とを以て」しなければならぬのである。神は儀式や美はしい詞を以て交るべき者ではなくて、精神と信仰とを以て拜むべき者である。盛大なる祭禮を行ふよりも、純潔なる生活を營み、奉仕の生涯を送るべきである。「情みを好みて祭を好まず」とは此事である。

第二、之は友愛的關係である。神人間の交は人格なる神と人格なる人との親しい關係である。神は天外高く在して近づき得ない存在者ではない、宇宙間森羅萬衆のうちに内在して、人間に極めて近く在す所の父神である。恐怖すべき者ではなくして親しむべき者である。人は神の子である。果して然らば父子の間の交りに仲介者の必要はない。自由接近し、親しく交り得るのである。

以上の事は明々白々、極めて平凡な眞理であつて、三歳の兒童と雖も之を知る程のものなるに拘らず、實際に於ては永い間認められず、今日に於ても尙悟り得ない所謂基督教徒も少なくないと云ふは嘆はしい事である。人の精神と神の心靈との人格的關係が無視され、或は國の法律により、或は教會の教儀により、或は聖職の權能などにより之が侵害され、又は其中間に古聖人の代願であるとか、聖母の執成とくせしであるとか、神父の仲介であるとか云ふ者によつて宗教の眞命が奪はれつゝあるのである。

プロテスタント教徒は此弊風を一掃せんとして起ち、歐洲に於ける自由な精神的な宗教運動の第一戦線に常に奮闘を續けたのであつた。之が爲め彼等は到る所に迫害を受け、火に投ぜられ、水に沈められた。開拓の事業はいつも犠牲の奉仕である。眞理は最後の勝利者である。幸にして、吾々プロテスタントが古來血を流して主張して來た所のものゝ大半は基督教新教諸派の不知不識の間に容るゝ所、若くは容れられんとする風運を見るに至つた事は感謝に堪えない。

## 一一 信條よりも生活

キリスト・イエスの説かれた宗教は、神を父とし、人を兄弟として歩むべき、敬神愛人の道であつた。神と人との知的關係を第一とするものではなくて、人格的關係、即ち生活を主とするものであつた。されば初代基督教徒の間に於ては主イエスに對する忠誠、即ち彼の人格的感化に浴し、彼のうちに神の恩恵と人の救とを發見し、希望と感謝と歡喜とに満ちて、献身犠牲の奉仕の生涯を送らんとする熱誠が彼等相互間の結束の網であつた。然るにいつしか、彼等の信仰を文字に表はし、合理的、組織的な信仰個條を作成するに至つた。之は其當時に於ては極めて自然な必要な

事であつたらう。如何となれば教會内に種々の異教的教説が行はれ、稍もすれば宗教生活が害はれんとしたからである。併しながら茲に又重大な危険が胚胎した。すなはち、是に由つて宗教を或宗教的命題の知的承認の事としてしまつた。神と人とに對して如何なる態度を取り、如何なる生活を歩むべきかと云ふ事よりも、如何なる教儀（三位一體とか、處女降誕とか、奇蹟とか、贖罪とか、聖化とか）を信奉すべきかと云ふ事を先にする傾向が生じた。

信條と云ふものは或時代の人々が團體的宗教生活を營む爲めに、其人々が體驗した所の基督教眞理を其時代の思想を以て解釋表明したものであるから思想變遷の斷層を語る所の化石に過ぎない。されば之を以て萬代に通ずる金科玉條としてはならない。時代は移り思想は進轉する。人生諸他の方面に於ける諸眞理と同じく、宗教の眞理も亦人知の進歩と、徳性の發達と、信仰の達成と共に益々闡明せられ、純化されるものである。されば一時代には完全と思はれた信條も、次の時代には束縛となり、重荷となる。精神生活の進歩を妨げ、信仰を形式化する禍根となるを免れない。

今日基督教新教の多數の團體に行はるゝ信條は何れも古いものである。使徒信經は二、三世紀の頃、ニカヤ信條は三百八十一年、ウエストミンスター信條（長老教會の標準となつてゐるもの）は千六百四十五年、アサネシアス信條（英國キリスト公會の用ゆる）は五、六世紀の頃のもの、其他も皆遠い過去に作成されたものである。之を現代人に向つて信仰生活の規範とせよ強請せんとするは不合理も亦極めりと言はねばならぬ。バプテストは古來、信條を作るに反對した。信仰の標準を聖書に置き、各人神の聖靈の指導の下に、自由に之を解釋すべきを絶叫した。キリストの精神に忠なる生活を信條の凡てとしたのである。バプテスト教會は信條は有しないが、教會の憲法とも云ふべき誓約を有してゐる。併し之は一個々々の教會が自由自在に作成しても差支はない、教派として之に依るべしと云ふ規定はな

い。けれども便宜上、日本に於けるバプテスト教會は大抵之を採用してゐる。之は左に見らるゝ通り、宗教生活の方針に關するものである。

#### 【教會の約束】

われら神の恩恵により、イエス・キリストを主として、これに全くまかせ、また信仰をあらはすために、バプテストをうけて主の教會にいらたれば、われらきよき聖靈のたすけにより、謹みて相互にこの約束をむすばん。

われら共に、兄弟のいつくしみをもちてあゆみ、あひたがひに氣をつけ、つねに互のよろこびを喜び、互のなほしみを憐みて共になしむべし。

主の日のあつまり、及び定まりたるあつまりに來り、この教會のきよくなること、和合すること、榮ゆることを祈り、又バプテストと晚餐との二ツの聖典、および新約書のをしへと、教會のたゞすところの誠めとをまもりて、教會を人によりて成れるものと思はず、神によりて成れるものと信すべし。

われらはこの教會を支へ、かつ萬國にさいはひの音づれをひろめ、また貧しき者にほどこしをなすために、喜びて金を献ぐべし。

ひそかなる祈禱、また家庭の祈をつとめて、われらがあづかりたる子どもらを、神の道にしたがふやうに教へ育て、またわれらきよき心と、正しき行と、萬民をいつくしむことによりて、人々を救主にみちびく様に眞の道をあらはし、主と相見えむ時まで、この約束したることを堅く守るべし。

### 三 教權主義の打破

宗教を殺す者は、多の場合に於て、職業的宗教家即ち僧侶である。神と人との中間に、いつしか錦欄の衣織しい特權階級が介在するに至り、宗教の神聖は汚され、生命は奪はれてしまうのは基督教に限つた事ではない。バプテストは僧俗の區別を全然認めない。信者たる者の萬人祭司主義を執る。神を信じ基督を主とする者は何人でも神の人であり、教職たる資格を有する者である。福音の宣傳は教義を宣傳する事ではない、己が體得したる宗教的經驗を人に傳ふる事である。故に苟も信仰の體驗を有する者であるならば、何人でも之を爲し得るのである、然り職業的教師よりも反つて有効に爲し得るのである。勿論凡ての信者は全時間を捧げて宗教の事にのみ没頭する事は不可能である。されば教會内に分業が起り、信者中辯才あり、比較的聖書の知識に長じ、徳望あり、且つ神の召命なりと信じ、自から進んで此事に當らんと志す者を擧げて之に福音宣傳の事、教會の事(即ち教會指導の任)を托するに至つた。之が教職である。一般信徒と教師との區別は何等根本的なものではない。便宜上のもの、任意的のものに過ぎないとはバプテストの主張である。

ヒンデルスブルグ 天路歷程の著者として知らるゝバンヤンが永い間に亘り再三投獄の難に遭遇したる主たる理由は、實に彼は普通の一信徒たるに拘らず、公然布教の事に當つたからであつた。

バプテストは信徒と教職との間に根本的特權的差別の存在を否定する計りではない、教職間に人為的階級の存在をも認めない。法皇、大監督、監督、長老、教師、教師等の階級的の區別はあるべき筈のものではない。教職は皆平等

の地位に在るものなる事を主張する。神の王國の主權を代表し、直接に其民を愛撫する無上主權者は實に唯一のイエス・キリストであつて、國王も、法皇も、監督も、又其他如何なる者も其代理者となつて、吾々信者に臨む權能を有する者ではない。

以上の理由に基づき、バプテスト教會に於ける教師の選定、任免は一個々々の教會の權能に屬するものであつて、其教會員多數の欲する所の人物を自由に招聘し得るのであつて、別に本山とか、大會とか、中會とか、監督とか、幹部などゝ云ふ中間者に計る必要は存しないのである。

### 四 教會禮典の表徴主義

古來基督教會に行はれて來た禮典(聖餐、聖禮などゝも言はる)がある。之が天主教會には七つ(バプテストマ、聖餐、堅信禮、懺悔、臨終塗油、任職式、結婚)あり、新教會にはバプテストマと聖餐との二つある。

バプテストマ(ギリシヤ語の水に浸すの意)とは浸禮又は洗禮などゝ言はるゝものであつて、人が新に信仰を起し、心を改めて、新生涯に入るに當り、從來の罪の生涯に死んで義の生涯に生きると云ふ宗教經驗を發表せんが爲めに行ふ儀式である。故に精神的更生の表徴として水中に全身を浸し、古き罪の身をキリストと共に葬り、彼と共に復活すると云ふ意を具象する式である。バプテスト教會に於ては聖書の「我らはバプテストマによりて、彼とゝもに葬られ、その死に合せられたり。これキリスト父の榮光によりて死人の中より甦へらせられ給ひしごとく、我らも新しき生命に歩まんためなり。」(ロマ書六章四節)の意味を汲み、又初代教會の慣習が最も能く新生の精神的事實を表はすものと信

じ、通例全身を水に浸すのであるが、或教會に於ては單に數滴の水を候補者の前額に點するのである。洗禮又は滴禮と云はるゝは之が爲めである。

バプテスト教會はバプテスマの式そのものに何等神秘的效力の存するを信じない。或基督教會などが云ふが如く、之に特別な神の恩恵や救の力などがあるとは考へない。儀式は宗教的生命を與ふるものではない。然るに初代教會以來中世紀に至るまで、教會は至つて低級なる異宗教より轉宗して來た信者の多數を以て滿された結果、又ユダヤ教の不純な思想を去る事が出来なかつた結果、基督者の間にバプテスマに關して至つて幼稚な宗教的思想を抱く者が少なくなかつた。此思想は残念ながら今日の教會にも多少其痕跡を遺してゐる。

原始諸宗教に於ては、水は清むる力があり、又動植物の成長に必要缺くべからざるものであると云ふ所から、一種の神秘力を有するものとせられた。かくて潔めの爲め、魔除の爲め、命名式、又は元服式に當り、或は其宗教に新たに入會するに當り、水の式が用ゐられた。我國の神道にて行ふ祓、或は禊ソギは身ミを清むるものであつて、伊邪那岐命が黄泉より歸り給ふや、其國の汚穢を厭ひ給ひて橋の小戸にて海水に浸つて御身を清めたもふたと云はれてゐるが、今日の禊は罪を清む式となつてゐる。宗教學上より云はゞ之は他宗教に行はるゝバプテスマと同一形態のものである。此らの宗教の考では水は實際に精神的にも罪を潔む效力を有するものとするのであるが、基督教會にも此考へは廣く行はれた時代があつた。殊に中世紀に於ては、バプテスマの式其のものゝに不思議な能力が存するものとせられ。眠つてゐる人、若くは發狂した人に之を施すも、其人々ひとびとに之を受けんとする意志が前以てあつたならば效力を生ずるものであると論じた人々ひとびとさへもあつた、其人々は言つた、誕生は其人には無意識であるが如く、第二の誕生たる精神的新生も亦無

意識であると。さればシブリアンはバプテスマは神浴であると言ひ、之を受る者の信仰の有無に拘はらず效力を有するものと主張した。

基督教會が嬰兒にバプテスマを施すに至つた一の理由は、之が神秘的恩恵的效力を有するものとせられたからであつた。オリゲンは嬰兒のバプテスマは前生の罪を清むと言ひ、フレイキア派の人々はバプテスマを受けない小兒は刑罰を受けるとは云はれないが、天國に行かれないと説き、北歐人はバプテスマを受けぬ小兒は惡魔につかれるとし、シ、リーやスペインではバプテスマを受けぬ小兒を卑んで「ユダヤ人」「黑人」「トルコ人」と呼び、英國やスコットランドではバプテスマを受けぬ小兒は妖靈となり審判の日に至るまで空中に彷徨すると信ぜられた。

以上の如き思想が歐洲に行はれた時代に於て、教會がバプテスマの式を以て恩恵の神秘力を有するものとしたのは怪しむに足らない。かゝる迷信を打破せんが爲めに絶叫したのがバプテスト並にその同志者等であつた。バプテスマは魔力を有する禮典ではない、既に神を信じ、新たに生れ更つた人が、己が體驗せる宗教的同心の事實を之によつて發表する表徴である。而して教會の側、即ち之を施す者の側より言はゞ、之を受る人が自から進んで信仰に入り、新しい共同生活に入らんとするを認め、其人を教會員の一人として受け入るゝ式である。之は神聖なる教會に加入する決心を具體化する形式であるから神聖なものではあるが神秘不可思議な力を有するものではない。

聖餐(聖晩餐ともいふ)とは新約聖書に、其起源に關して

「主イエスわたしたち付され給ふ夜、パンを取り、祝して之を擘き、而して言ひ給ふ「これは汝等のための我體なり、我が記念として之を行へ。」夕餐の夕方のち酒杯酒杯をも前の如くして言ひ給ふ「この酒杯は我が血によれる新しき契約なり、飲むこ



とに我が記念として之をおこなへ。汝等このパンを食し、この酒杯を飲むごとに主の死を示して其來り給ふ時にまで及ぶなり。」(コリント前書十一章二三節以下)

とあるが如く、キリストが將に此世を去らんとするに當り、十二人の弟子等と最後の晚餐を共にせられた時、弟子等に之を永遠に記念として執行すべしと命ぜられたのに基づき、今日に來るまで基督教會が定時之を行つて來た禮典である。聖餐は之に由つて一方キリストが我等の爲め忍び給へる苦難を憶え、且つ彼との靈交を覺えると共に、他方信者一同は、キリストが我らの救の爲めに十字架上に裂き給ふた肉體に象りたるパンを食し、彼の流し給ふた血に象りたる葡萄酒を飲むことにより、精神的協同一體觀を深くし、献身奉仕の生活に進まんとする精神を涵養する爲めのものである。

さればバプテスマが精神的誕生を表徴するが如く、聖餐は精神的成長を表徴するものである。然るに或基督教會に於ては、臺の上に置かれたパンと葡萄酒とは教職の祝福の祈禱によつて、聖書の文字通り、實際それらがキリストの肉と化し、血と成るとする『化體説』を取り、又他の一二の教會は其パンを食し、其葡萄酒を飲むと共にキリストの眞の肉と眞の血液とを受るのであると主張する。精神主義を主張する基督教會が物質的思想から離れ得ざるを見るは驚くべきである。

バプテスマ教徒は聖餐式が表徴する靈的眞理を認め、信仰を以て之に參與する者に、之が與ふる恩恵の少なからざるを信する者であるが、之に何らの秘蹟の存するを信じない。之は、バプテスマの式に於けると同じく、神の不可見の眞理を可見的に具體化した繪畫の如きものであると見てゐる。

## 五 教會の成員——自由意志の發露

自覺なき信徒ほど其宗教の發達を阻害し、其生命を傷ける者はない。筆者は生れから言はゞ曹洞宗に屬す檀徒であるが、佛教信者ではない、換言すれば自我の宗教的自覺に基づき、自我の自由意志を以て佛教に歸依した譯ではない、偶然曹洞宗を寺とする家に生れたと云ふに過ぎない。之に類する事は昔基督教國にもあつた——今日も多少ない事はないが、之は宗教を血統の事、偶然の事とし、精神的宗教の生命を奪ふものである。

教會とは宗教生活を各自の間に増進し、且つ之を世界に擴張せんが爲めに、キリスト信者が自分の意志によつて組織する團體である。故に自から既に宗教的經驗を味ひ、精神的に生れ更つた人々が各自の自由意志に基づいて、之に加入すべきであつて、單に父母が教會の信徒であるから、其子供らも其教會の信徒とすと言つたやうに、何ら宗教的自覺に達せず、又自由に自我の意志を發表し得ざる嬰兒にバプテスマを施し、之を教會員(若くは准教員)と見做すが如きは無意味なるのみならず、宗教の冒瀆であるとバプテスマ教徒は思惟してゐる。

吾々が嬰兒のバプテスマに反對するのは之が爲めである。嬰兒バプテスマの起源の一は既に言つたやうにバプテスマの式に神秘力を歸した事であつたが、も一は、基督教會が國家と結合した結果であつた。つまり宗教が政治と結婚して産んだものが嬰兒バプテスマである。國教の立場からすれば其の國の臣民は盡く皆國教の信者たるべきである。其の國家に生れた臣民は原則として悉く皆其の國が國教と定めた宗教を信ぜざるべからざる筈である。従つて法律は小兒にバプテスマを施すべきを要求するは當然の事であらう。

紀元六百九十二年(西曆)西サキソソ王アイナは法律に由り、生れて三十日以内に小兒にバプテスマを施すべきを要求し、之を怠る者は三十シルリングの罰金に處した。シャールマン帝は七百九十七年に次の法律を發布した。小兒が生れてから一ケ年以内にバプテスマを施さぬ者よりは、貴族ならば百二十シルリング、士族ならば六十シルリング、其の他の者ならば三十シルリングの罰金を徴収すべしと。當時羊一頭が一シルリンで買はれたと云はれてゐる。其の頃バプテスト主義を執れる幾多の忠實なる基督教徒は此の刑罰に處せられたのであつた。法律によつて信者は造り得る者ではない。今日かゝる考は殆んど地を去つたが、嬰兒バプテスマの觀念は尙其の跡を絶たない。

バプテストは主張する、教會の成員たる者の資格は家系でないと同時に、或一定の教義(信條の如き)を承認するや否やでもない、キリストを信するや否やである。換言すればキリストを精神上の主とし、之に對して絶対の信賴と服従と奉仕とを捧ぐる覺悟を果して有するか否やである。斯る決心を有する者は教會に入會する資格を有する者である。教會員多數が其の人をかく認むる時に彼にバプテスマを施し、彼を教會員として受容するのである。之に反して信者の家庭に生れたるが故を以て、又は基督教の或宗派を國教とする邦土に誕生したるが故を以て教會の員と見做すが如きは宗教の廢頓の源である。今日印度に於て、一般人の間に「教會員」と云はゞ至つて不評判であるが、キリストらしい人と云はゞ敬慕の標的となつてゐると云はるゝは何故であらうか。

## 六 教會のデモクラシー

バプテスト教會は中央集權高僧獨斷政治たる法皇政治、監督政治、並に長老政治に反對して會衆政治、即ち共和政治を執る。教會は神を信じ新たに生れた人々が精神的共同生活を營まんが爲めに意識的に結合したる團體であるから、教會員は何れも平等の地位に在り、老若男女學無學の間に何ら階級的區別を置かない。「汝らの師は一人即ちキリストなり、汝らはみな兄弟なり」とのイエスの語に堅く立つてゐる。キリストの聖意に背馳しない限り、教會員多數の決議は支配權を有する。少數者は之を承認し、之に服従する義務がある。さればバプテスト教會に於ては教會の代表者及び役員の選舉、入會者及び退會者の決定、懲戒の程度を加減など皆教會全體の意志に従つて爲すべきものである。バプテスト教會に於ける役員は牧師と執事とである。監督、長老、牧師などの名稱は同一階級に屬する同一職務に適用したものなる事を主張する。之は近代聖書學者の一般に認むる解釋である。例へばバプテスト以外の學者らにして『新約聖書の言語に於ては教會の同一役員が何等の差別なく、或は監督、或は長老と呼ぶるゝと云ふことは神學說を異にする神學者等が當今一般に認むる所なりとす』とライトフットは言ひ、「監督と長老とは新約書に同意義に使用されてゐる。監督と云ふ時は其職分を指し、長老と云ふ時は其地位を指すのである」とコネベア・ハウソンは言つてゐる。つまり前者は希臘の制度より、後者は猶太の制度より取つた名稱である。

牧師も執事も共に教會の一成員であつて、牧師は専ら教會の精神的指導と保護とに當り、禮典の執行、福音の宣傳を掌る。執事は専ら教會の俗務(會計、記録其他の事務)に當る。各教會はそれ／＼自主獨立の自治團體であるから、

一個々の教會は自由に教會の憲法、信條を制定して差支ない。必要な場合には教會は決議により普通の會員をしてバプテスマや聖餐の禮典を執行せしめてもよい。

神と人との直接關係の上に信仰の第一義を置く必然の結果として、バプテストは各自良心の自由を主張すると同時に他人の自由をも尊重する。神靈の指導は自我の上にあると同様に他の兄弟の上にもあるべきを信するが故に、信者は皆神の祭司である。布教の責任と任務とは彼のものである。此關係は一の教會と他の教會との間に於ても同様である。一教會と他教會とは兄弟の關係を保ち、友愛的交際を爲してゐる。併し其間に何ら根本的な有機的連絡（精神的以外な）はない。例へば我國に於けるバプテスト諸教會はバプテスト組合を組織して、相互の親睦を計り、協同して神の國の發展に當つてゐるが、我國内にあるすべてのバプテスト教會が必ず之に加入すべき義務はない、又何人も之を強制的に加入せしむる力を有しない。實際今日加入してゐないバプテスト教會もある。又組合總會の決議と雖も決して強制力を有するものではない。單に友誼上賛同協力を努むると云ふに過ぎない。バプテスト教會に本山がないのは之が爲めである。

バプテストは新約聖書に教會と云ふ語が更に異なつた意味に使用されてゐる場合のある事を認める。それは既に述べたやうな地方教會を指すのではなく、極めて廣い意味のものであつて、古今萬世に亙り、天と地とに於ける新たに生れた人々（信徒）の全群を指すのである。此意味に於ける教會は神の國と云ふ語と同意義である。併し之は精神的團體であつて、有形な教會と混同すべきものではない。ロマ教會は之を占有せんとしたのであるが、歴史は其失敗を語つてゐる。

## 七 政治と宗教との分離

國家が宗教を利用して治國平天下の具とするは都合のよい場合もあつたらう。宗教も亦國家の威力を借りて教勢を擴張し、又之を維持するを便利とした事もあらう。併しかく國家と宗教と結託したる結果は、何れの國に於ても國家の爲めにも宗教の爲めにも有害であつた事は事實の明示する所である。本來宗教には、永遠的要素が其基調をなしてゐるのであるから、當然時代に超越する所がなければならぬ。然るに一時的俗政の下に宗教が其永遠性を犠牲に供するは宗教の墮落である。之が爲め宗教は生命を失ひ、其當然盡すべき任務を全ふする事が出来ず、國家を指導すべき者が、却て指導されなければならぬ破目に陥るのである。

イエスは政教は分離すべきものとし、「カイザルの物はカイザルに、神のものは神に納めよ」と言はれ、又「我國は此世の國に非ず」と劃然たる區別を教へられた。此精神の上に立つたバプテストは古來國家と宗教とは全然分離すべきものなることを主張した。國家は教會に干渉すべからざると同時に、教會も亦國家に向つて特別なる庇護を要求すべきではないとは吾々が鮮血を流して主張した點の一である。國家は其國の臣民を保護し、あらゆる合法的團體を保護すると同一の意味に於て教會を保護し、其財産を保障し、其自治の權能を認め、其發達を助成するは當然の事であるが、さればとて進んで教會の内部にまで立入り、信仰の内容、禮拜、教義、政治、布教の方法などに全然干渉すべきものではない。

政教分離の實現に先鞭をつけたのは米國であるが、米國をして此政策を執るに至らしめたものはバプテストである。

此方面に最大の貢献をなした者はロヂア・ウィリアムス (Roger Williams) である。彼はロンドンの洋服屋に生れ、ケンブリッジ大學を出て、英國教會の牧師となつたが、國教の弊害、國家が宗教に與ふる壓迫を痛感し、自由の天地に自由の宗教生活を憧憬して新大陸に渡つた。彼は米國 (ボストン) に上陸して失望した、それは自由の天地と思つて來たが、成程英國國教と云ふ束縛はないが、清教徒ピュリタンと云ふ新しい束縛者を發見したからであつた。清教徒は新米國に神政の理想を實現せんとし政教一致を標榜してゐた。教會の會員に非ざれば市民權を享有する權利なく、宗教上の意見を異にするが故に、法律上刑罰に處せらるゝ事あるを知り、ウィリアムスは強い反對意見を發表したがボストン政府は彼を危険人物として遠避けてしまつた。彼は次にセーラム植民地に轉じたが茲でも當局者と容れる事が出来なかつた。斯くて紀元千六百三十五年十一月三日次の理由の下に退去處分を受け、六週間に管轄地外に出づべきを命ぜられた。(1)法令に反して説教せる事、(2)英國教會を反基督者と呼はりし事、(3)官吏の前に宣誓を爲さざる事。故に安寧秩序を害する事。

たま／＼病を得、期限内 (六週間) に出發不可能なるを以て延期を出願したが許可せられず、當局は彼を捕へて、強制執行英國へ返送する事となつた。之を耳にした彼は嚴冬一月病を押し漂然として廣野へ逃れ、あらゆる困難と闘ひつゝアメリカ土人の群に投じ、其厚意の下に土地の讓與を得、こゝに同志二十人のものと共に絶對的自由を理想とせる完全なる共和政治の團體を組織するに至つた。千六百四十年に至り此同志は三十九人に達した。此土地を神の攝理によつて與へられた事を記念せんが爲めプロヴィデンス (攝理) と命名した。是現今のロードアイランド州プロヴィデンス市であつてブラオン大學の所在地である。此植民地の根本方針として確立した所のもは是であつた。自由州

に於ける自由教會、即ち政治の事に關しては多數の意見に従つて萬事を決するが、宗教の事に關しては各自の良心の指導に一任すると言ふのであつた。其憲法によれば「何人と雖も此植民地の安寧を事實上妨げざる限り、宗教上の意見を異にする理由を以て、如何なる場合に於ても、審問、妨害、逮捕、苦痛、刑罰を加へらることなかるべし」とある。バプテストが古來主張して來た政教分離の根本義はウィリアムスによつて始めて實現された、而して此主張は遂に北米合衆國全體の採用する所となり、今日米國に於て見るが如き完全なる政治宗教の分離を完成したのである。ジエー・エル・エム・カツリーがロンドンでジョン・ブライトと食事を共にした時、ブライトは、米國が政治學上に貢献した顯著なものは何であるかと尋ねたが、カツリーは「それは宗教自由の義」であると答へた。ブライトは卓を打いて「非常な貢獻」と嘆稱したと傳へられてゐる。

ウィリアムスは始め英國教會に屬し、米國に來つて會衆教會に轉じたが、小兒に洗禮を施す事の無意味にして聖書の教に反するを認め、自分の教會員十一名の同志と共に新たに、浸禮バプティズムを受け教會を組織した。之が米國に於ける最初のバプテスト教會である。其後未だ三百年に達しないが、教會の數は北米に於て五萬八千五百七十五個に、信者の數は八百四十八萬五千六百八十三人に達するに至つた (千九百二十六年調バプテスト世界統計による)。

レオナード・ウィルセイ・ベイコン (組合教會の人) は、米國の政府が、宗教には干渉しない事と、法律の前に凡ての宗教團體は同等であると云ふ主義を採つて居る事に就いて次の如く記して居る。「米國をして此主義を採用するに至らしめし主なる名譽は、バプテストに歸しなければならぬ。他の教派殊にプレスビテリアンは自分等の自由を主張したフレンドとバプテストとは良心と禮拜の自由を要求する事に一致した。而して法律の前には皆同じであると言ふ

た。然しバプテストは主として此が爲めに盡力した。英國の國教會と戦ふた。最後の勝利を得たのは主としてバプテストの働による教會と國家とを分離する主義は、米國が文明と基督教の上に爲した最も大なる貢獻である。」(米國史 二二二頁)

屯に角バプテスト教徒によりて開拓された政教分離の原則は其後各國に其萌芽を發し、殊に世界大戰以後此原則を採用しない文明國は殆んどないと言ふ有様を呈するに至つた事は政治の爲め宗教の爲め大に慶賀せざるを得ない。

### 八 バプテストの名稱の起源

バプテストの主義主張を抱持せる基督信者は歐洲の各國に早くより存在した。併しバプテストと言ふ名稱を以て創立された教會は英國に於てであつた。すなはち千六百十一年ロンドンに第一ゼネラル・バプテスト教會が創設された。其の由來はかうである、英國々教會の教職にジョン・スミスと云ふ者あり、リンコルン州ゲエンスボロウ市の副牧師であつたが、國教の非理を認め分離派の一人となつたので、四方より來る迫害に堪えず、海を越えて和蘭に逃れアムステルダム市に移住してバプテスト主義の教會を設立して布教に従事してゐた。彼の下にバプテストを受けたトウマス・ヘルウエス並に其他の人々が申合せの上ロンドンに歸つて來て此教會を組織したのであつた。千六百二十六年には英國中に十一個のゼネラル・バプテスト教會を見るに至り、千六百四十四年には四十四個に達した。

これらの人々は小兒のバプテストに反對した計りでなく、小兒の時に受領したバプテストの式は、當人の自覺なく自由意志より出でたものでないから、無意味であると云ふ考から、教會を組織するに當り、或は新たに此教會に加入

するに當り、もう一度バプテストを受け直したのである。大陸では此主義の人々をアナ・バプテスト (Anabaptist) 即ち再びバプテストを行ふ人と稱んだが、英國に於てはアナを去り單にバプテストと呼ぶるゝに至つた。それも始めはバプテスト教會の人々が自からを呼ぶ爲めに附した名稱ではなかつた。他の教會の人々が多少輕侮の意を以て稱んだのに起源する。英國に於ける初代のバプテスト信徒はバプテストは全身を水中に浸す事であると強制しなかつたのであるが、聖書に忠なるべきを主張するに隨ひ、バプテストの語義が全身を水に浸すの意なると、又之によつてキリストと共に罪の身が一度葬られ、更に新しい生活に復活するの意を表彰するに浸禮が最も適當の方法なりと考へらるゝに至り、滴禮(二三滴の水を形式的に受禮者の前額に施す)や、洗禮(少量の水を身體の一部分に施す)を廢し全身浸禮を行ふのが一般の習慣となつた。

### 九 殉教者の血に培はれたるバプテスト

傳統的形式主義の宗教に反抗して精神主義を高調し、國家の干渉を拒否して、教會の絶對的自由と個人の自主とを絶叫したバプテスト教徒が迫害を受けるは火を嗜るよりも賤な事であつた。バプテストと立場を共にせる、大陸に於ける篤信なる人々は拷問、流竄、終身禁錮、斷頭、火刑、溺殺などの刑に處せられた。ブルエス(佛)のペテロは異端者として千百二十六年火刑に、ラウサンのヘンリーは終身禁錮に、アルノルドは其身は火に投ぜられ、其友はタイペー河に流された。殘虐非道の極は瑞西に於て而も改革者ツウイングリーの差金の下に行はれた。

英王ヘリンリ八世は登極と共に次の法令を發布した。「一、バプテストにつき、又は聖餐につきて抗論するものは

十日以内に帝國內を退去せしむ。二、外國人にして、小兒の際に受領せしバプテスマの無効を主張して再びバプテスマを受けたる者が、英帝國內で其主張を宣傳するに於ては十二日以内に退去すべきものとす、拒む者は死刑に處す。』翌年此法令に觸れ十人の和蘭人が火刑に處され、其次年は十四人、千五百六十八年には二人が此刑に、六十三人は獄に投ぜられた。千五百三十八年十一月十四日三名の男子と一名の婦人は薪木を負はせられセント・パウロ大會堂前の廣場に引出され、群衆の前に晒し者にされた。當時盜賊は特赦の恩典に浴する事が出来たが小兒のバプテスマを拒む者は之に浴する事が出来なかつた。

千五百七十五年四月三日二十五名の和蘭バプテスト教徒の一群がロンドン市の郊外にある一私人の住宅で禮拜の爲め集會を開いたと云ふ件で拘引され裁判所に於て訊問された。

問「小兒にバプテスマを施してはならないと言ふのか」。

答「聖書にさう教へて居るを見た事は御座いません」。

問「基督信者は必要な場合には宣誓するも差支はないではないか」。

答「キリストは爾り爾り、否々と言へと仰せられました」。

斯くて彼らは鎖に縛られマーシャルセーの獄に投ぜられ、其うち十四人の婦人と一人の少年は船に乗せられ追放されたが、役人は乗船場に至るまで少年の後頭を亂打したと云はれてゐる。

此後一世紀間バプテストの主義を奉ずる者は公然集會を開く事を許されなかつた。千六百七十年五月二十九日ルーエス市のバプテスト信者らは市から一哩計り距つてゐる信者の自宅で集會した事が間諜の密告する所となり牧師は二

十ポンド、會衆四十人は各自五シリングの罰金を科せられた。牧師は、今も同様であるが、貧乏で之を支拂ふ力になかつたので信者中の五人に之を割當て、物品で納入を許可した。

ウォルター・ブレット（乾物屋）砂糖二樽、

トマス・バルナードと其弟は兩人分として牝牛六頭、

リチャード・ホワイト（眞鍮細工屋）藥罐其他、

ジョン・プラス夫妻よりは牛酪、其他靴屋よりは靴五足、帽子屋よりは帽子三個、貧しい石工よりは蒲團と細君の下着とを取上げた。

古いバプテスト教會の日誌に次の記事がある。『千六百八十三年一月二十一日朝八時開會、同十時閉會、十時過ぎ捕吏二十七人、うち七人は乗馬にて来る、閉會後の事として一同無事。三月——日此の週國教々會へ出席せざりし爲め百五十人は各二十ポンドの罰金を科せらる。三月十五日森林内に集會す。閉會四十五分を経たる頃、突然捕吏の包圍する所となり、急遽逃走す。フォーンネス氏は病體の事として捕へられ六ヶ月間グロウスターの獄に投ぜらる』。

政府は密偵を放つてバプテスト教徒が私宅で説教會を開くを探り、發見次第信者を逮捕せしめた。チオルチ・ハモンド氏はカンタベリーバプテスト教會の牧師であつたが、近隣の諸所で傳道説教會を開き盛に布教に従事した。或時説教會へ赴く途中驟雨に遇ひ樹下に之を避けてゐた。そこに一人の男が馳て來た。雜談中其の男は密偵であつて、バプテスト教徒の秘密傳道集會を探らん爲めの者である事が判つた。ハモンド氏は言ふ「僕も人を捕へる者です、それでは御一緒に参りませう」と、つれ立つて説教場と定められた家に行つた。『さあ、誰も説教する者がいやうだ、誰

か説教しなければ説教會と言ふ名目が立たないが、君が説教し給ふか、又は僕がいたしませうか。『イヤ私は御免蒙ります』では仕方がない、僕がやりませう』と。密偵は此の説教に感激し遂にバプテスト教徒となつた。

こんな風であつたから、英國に於ける初代のバプテスト信者や牧師らは馬車引の變装をしたり、行商人の風をしたりして、役人の目を避けつゝ精神的宗教の普及に當つた。來年は其の三百年の記念に當る文豪パンヤンが十三年の長い間を牢獄に送るに至つたのも平信徒たるバプテストとして布教に従事したからであつた。

エリザベス・ガウント夫人はロンドンの富めるバプテスト信者であつて、慈善心に富み、監獄に囚人を訪問し、貧民を救助し、不遇の人に同情を表するを樂みとしてゐた。或時國事犯人を邸内に保護し、外國渡航の便宜を計つたと云ふので火刑に處された。それは千六百八十五年十月二十三日であつたが、刑場に赴くに際し獄吏に一冊の書を渡して去つた其に次の手記があつた。

『願くば、此度我身に及べる事柄につき、何人も望を失はるゝ事なく、惡しき心を起し給はざらん事を。神は理由なくして斯る事を爲し給ふ事なければ……我は神の御榮の爲め、苦める人の友となり、之に由りて主イエスに仕へまつれる事を露程も悔ゆる所あらず。我をして惱める多の人々の慰めたらしめ、其の友たらしめて、我生涯を有用ならしめ給へる神の聖き御名を崇め奉つる。死なんとする人々に我が與へし祝福は我に復歸り來れり。我に對して加へらるゝあらゆる兇暴殘虐をば我は喜んで赦さん云々』。

斯て彼女は刑場に赴き猛火の中に平和の眠に就いた。

エリザベス・バツカス夫人は牧師なる令息アイザツク・バツカス氏に千七百五十二年十一月四日附に送つた手紙に

『平般米其地に起り候難儀の有様を承知いたし、一時は途方に暮れ、深く悲み申候も、只今にては心配も重荷も一切神様に御任せ申居候。左に私共の受候難儀の一端を申進候

兄上サミムルは入獄二十日に互り候。私事は去る十月十五日突然捕吏の襲ふ所と相成り、暗夜雨を侵して獄に伴はれ參り候。其翌夜ヒル氏サピンの兩人も投獄せられ候。私共は十參日の後出獄を許され候。在獄中は人々更る更る參り候て嘲弄と侮蔑とを加へ候も、神は常に私共と階に在して、猛火の如き苦痛のうちにも我等を慰め給へたれば、私共は名譽も、財産も、家族も、生命をも神の御爲めならば惜からぬ考を抱き申候。かくて牢獄も宮殿の如くに思はれ、浴せられたるあらゆる罵言嘲笑に對し却て感謝を神に捧げ申候。己の如くに隣人を愛するの念、己が赦を求むるが如くに人を赦す心が自然に湧き出で申候て、萬民に對する同情は溢れ、何とも申様なき恩寵の心鏡に入るの實驗をしみじみ味申候』云々と。

以上の如き迫害の時代に於て英國バプテストの教勢は驚く可き速度を以て進んだ。然るに千六百八十八年の政變と共に迫害は去つたが教勢は以前程奮はなくなつた。現今世界に於て殊にバプテストに加へらるゝ迫害と云ふものは恐らくルーマニア國を除いては存しない、従つてバプテストが信教の自由の爲めに鮮血を流す機會は殆んどなくなつた。昨年宗教法案の議會に提出さるゝや、二十世紀の今日、或は斯る光榮ある機會が我等日本バプテストの上に到來するに非ずやと思はれたが、それも空しく去つてしまつた。

## 十 パプテストと海外傳道

世界史上見逃すべからざる一現象は、十九世紀に於けるプロテスタント基督教の急激なる世界的發展である。其世紀以前に於て和蘭は多少の傳道者を海外に送つた。英國も亦千七百〇一年に米國に在る西印度人を教化する目的を以て一傳道會を起し、丁抹は千七百〇六年に南印度に、千七百二十一年にはグリーンランドに宣教師を派遣し、又モラヴァ派はアフリカ、セーロン、西印度、北米等に布教師を送つた。けれども以上は何れも至つて小規模のものであつて未だ一般人士の注目を引くに至らなかつた。然るに十八世紀の終り、十九世紀初に當り、海外傳道の叫は、深夜の靜寂を破る霹靂の如くに、歐米基督教會の天地を震動させた。而して此機運を齎すに最も與つて力あつた者は英國バプテスト教會のウキリアム・ケレー (William Carey 1761—1834) と米國バプテスト教會のアドニラム・ジャドソン (Adoniram Judson 1788—1850) とであつた。

ケレーは織物職人を父とした靴職人であつたが、青年時代に入信の體驗を握つて以來、傳道心に燃え、靴を直しつゝも聖書研究に没頭し、ギリシヤ、ヘブルの原語を學び、獨佛語にも通ずるに至つた。千七百八十六年推されてモルトンのバプテスト教會の牧師となつたが、俸給は家族を養ふに足らず、日中は學校を教へ、夜は靴を直し日曜日は説教に従事した。彼は常に基督教徒にして異邦の教化を怠るは、借金を返却せざると異なる所なしと主張し、海外傳道の事を寸時も忘れず。壁上世界地圖を掲げ、讀書によりて得たる各國の人口、宗教、風俗などの事を書き入れ、靴の底を打ちつゝも之を眺めつゝあつた。千七百九十二年三月三十一日ノツテングハムに於ける牧師會に於て彼はイ

ザヤ書五十四章二節の聖句「なんちが幕屋のうちを廣くし、なんちが住居の幕を張擴げて音むなかれ」を探り、外國傳道の急務を論じた有名な説教をなし、「大なる事を神に期待せよ、大なる事を神の爲めに企圖せよ」と絶叫し、多大の感動を列坐の人々に與へた。其結果として同年十月二日英國に於ける最初のバプテスト傳道會社の創立を見るに至つた。彼は自から進んで會社の任命する何れの地なりとも赴任すべき旨を申込んだ。彼の希望の地はアフリカであつたが敢て之を固執せず、千七百九十三年外科醫トマスと共に最初の宣教師として印度に派遣された。當時東印度會社は宣教師渡來を欲せず、種々の妨害を試みたのみならず、本國バプテスト教會の中に於ても外國傳道に反對する教會が多く、國內に神を知らぬ異教徒が極めて多く在るに非らずや、焉ぞ海外に之を求むるの必要あらんやとは一般の聲であつた。されば傳道會社と云つても最初の會員は十二名のみ過ぎなかつた。他派の人々は「熱狂せる靴屋」と言つて嘲笑を彼に加へた。されば傳道會社より支給さるゝ俸給も豊かならず、自分も亦永く之を受くるを潔しとせず、遂に製藍工場の支配人の職に就き、之に依つて衣食の資を得つゝ傳道に従事する事となつた。職工を集めて毎日教を説くのみならず、工場を中心として周圍二十哩、二百ヶ村に道を傳へた。彼は語學の天才であつたが、茲に滞在五ヶ年間に新約聖書をベンガル語に譯した。其後カルカッタにフォルト・ウキリアム大學の創立さるゝや彼は選ばれてサンスクリット語、ベンガル語、並にマラテ語の教授となり、三十年間此職にあつて教鞭を執つた。其間ベンガル語の舊約聖書を譯したのみならず、印度の二十四の方言に聖書の一部又は全部を譯し、又サンスクリット語、ベンガル語、パンジヤビ語、テルグー語などの文法書や辭書を著作し、福音普及の將來に資する所甚だ多く、其結果十九世紀の終りに信徒の数は二十一萬七千一百人に達した。千八百三十七年七十三歳にして任地に於て此世を去つた。



彼が東洋に於ける傳道事業の事蹟が基督教界に報道さるゝや、單に英本國の諸教會のみならず、遠く大西洋の彼岸の諸教會にまでも達し、信者は長夜の惰眠より醒され、主イエスの最後の命令「然れば汝ら往きて、もろもろの國人を弟子となし、父と子と聖靈の名によりてバプテスマを施し、わが汝らに命ぜし凡ての事を守るべきを教へよ。視よ、我は世の終まで汝らと併に在るなり」の語を想ひ起し萬民教化の責任を感じて起すには居られなかつた。

印度に於ける目覺しき傳道事業の米國に報ぜらるゝや、個人として或は教會として資金を送つて其事業を助くるもあつた。千八百十二年五人の青年宣教師らは海外宣教の使命を感じて東洋に出發した。此人々はバプテスト教派に屬する信者ではなかつたが、バプテスト教會員らは、大に此舉を壯なりと考へずは居られなかつた。其先き上記五人の青年の一人なるジャドソンは印度に向つての永き航海中新約聖書を熟讀研究したる結果、バプテスト教會が主張するバプテスマに關する見解が、初代基督教徒の信じた所であり、之が又聖書の教へる所であるを發見し、書を米國へバプテスト教會に送り、もし傳道會社を創設せらるゝに於ては自分は其宣教師たるを辭さぬ旨を述べた。之は米國に於けるバプテスト教會を激勵し、彼らは直ちに外國傳道會社を組織するの段取となつたのである。斯くジャドソン及びアンドヴァに於ける彼れらの同窓生の早時の活動は米國に於ける而も將來世界基督教運動に重大なる勢力の一となつた。アメリカン・ボールド傳道會社を組織するの源泉となつたが、今やジャドソンの改宗は北米バプテスト外國傳道會社をも創設する機會となつた。其後監督教會並にメソヂスト教會も亦外國傳道事業を開始した。米國に於ける長老教會は久しく組合教會と共同してアメリカン・ボールドに寄附金を送つて居つたが千八百三十六年に至り獨立の外國傳道會社を創始するに至つた。

千八百十二年にジャドソンは印度に渡行し、カルカッタに上陸したが、其當時暴威を振つてゐた東印度商會はあらゆる妨げを彼に加へた。彼は去つて緬甸に移つた。千八百二十四年英緬戰端を交るや、英國の間諜ならんと疑ひの下に彼は十七ヶ月間牢獄の中に鐵鎖に繋がれ、炎熱と饑と疾病と殘酷とのうちに呻吟した。始め彼が緬甸に来るや生前一百人の會員を有する一教會を設立する事と、緬甸語聖書を出版する事であつたが、彼がラングーン市にある事十年、アウア市にあること二年、モルマイン市にある事二十三年の間に豫期せるよりも更に大なる事蹟を擧げた。彼の死する時には緬甸人とケレーン人にして信仰を告白してバプテスマを受領せしもの無慮七千人、教會の數は六十三に及び、之に關係する内外教師(宣教師、牧師)の數百六十三人に及んだ。彼は單に緬甸語の聖書を翻譯したのみならず、緬甸語字典編纂の困難な仕事の大部分を完成した(英緬の部は完成、緬英の一小部未完成)。

ジャドソンの緬甸に於ける英雄的行動及び苦難の生涯は、印度に於けるケレーンの献身的傳道事業と相並んで歐米基督教界を刺激し、幾多有爲の青年をして「我福音を傳へずんば禍なり」との叫を發するに至らしめた。されば此兩先覺を目して近世東洋傳道界の開拓者と稱するは偶然ではなからう。十九世紀の終末に當りバプテストの傳道地は印度、緬甸、支那、日本、阿弗利加、南米、西印度等に亘り、米國バプテスト教會が支持しつゝあつた宣教師の數のみにて五百八十五人、土着の教授者四千八百六十八人、教會二千〇八十八個を算するに至つた。

## 十一 世界に於けるバプテストの現状

十九世紀の初に於けるバプテストの數は至つて微々たるものであつた。最も多數の信者を有せる北米合衆國に於て

すら千八百〇一年には信者の數、十萬人に過ぎなかつたが、千九百〇一年には四百二十三萬三千二百二十六人に達し、千八百年には合衆國の人口五十三人に對し一人のバプテストの割合であつたが、千九百年には人口が非常な勢を以て増加したにも拘らず十八人に對する一人の割合となつた。之に加ふるにバプテストと殆んど主義主張を同するフレ・ウキル・バプテスト派並にデサイブルス派の信徒の數を以てすれば十六人に一人の割合となつたのである。今日米國に於てバプテストが有する教育機關はシカゴ大學以下百〇五個の大學並に専門學校、七個の神學校、九十の中等學校等であつて、其基本財産は一億圓に達してゐる。昨年末の統計によれば全世界に於けるバプテストの勢力は

	教會數	信徒數
歐洲	八、一六九	六三六、四八八
亞細亞	三、〇〇八	三三三、三七九
阿弗利加	八六五	六七、六三六
北米	五八、五七五	八、四八五、六八三
中米及西印度	五四四	五八、七七〇
南米	四〇八	三〇、九六二
濠洲	四二九	三二、五一二

合計

七一、九九八

九、六四五、四三〇

ロシアを除く、同國に於ては近年バプテスト教會は非常な勢を以て發達し、目下壹百萬乃至貳百萬の信徒を有すると云はるゝも正確な數は得られない。

以上バプテストは世界に於て一千萬人を包容する一團體であつて、世界バプテスト同盟を組織し、其事務所を英京ロンドンに置き、兩半球に主事各一人を置き聯絡を保つてゐる。然れども此同盟なるものは全然友愛的關係のものであつて、何ら行政的職能を有する者ではない。全世界に在る一個々々の教會は各自主獨立の團體であつて、他より何らの干渉をも受けてゐない。たゞ全世界に散在する同志同主義の人々と手をつらね親交と、協力と、奉仕との實を擧げんが爲めの機關に過ぎない。

要するに過去百年の間にバプテストは驚くべき發達をした。而して之は主としてバプテストの主張が能く時代の要求に合致した事に基因する。彼らの主張は何であつたか。教權と形式と傳統との壓迫より脱出して、精神的純福音の生命に活きん事ではなかつたか。彼らが絶叫した良心の自由、聖書の至上權（會議の決議や、信條や、傳説よりも先づ第一に聖書の指示する所、自我内心の確認する所に従ふ）、政治と宗教と即ち國家と教會との分離は實に近代人の自覺せる精神と能く適應したのみならず、又彼らは大に之を鼓吹誘導したのである。

## 十二 我日本に於けるバプテスタの過去現在

## (一) 前驅者ゴープル氏

西曆千八百五十三年七月八日(嘉永六年六月三日)北米合衆國水師提督ペルリが艦隊を率ひて浦賀に渡來した時、其艦隊サステクエハンナ乗組の水夫に篤信忠實なクリスチャンでゴープルと云ふ者があつた。彼の祖父はバプテスタの教會の牧師であつた。ゴープル氏は成長するに及び福音を日本に傳へんと志を起し、其機會の到來せん事を祈つて居つた。たゞベルリが日本訪問の志あるを耳にするや、進んで其艦隊の乗組員となり、日本の國情視察の爲めに來たのであつた。彼は航海中能く其務を盡したるが故を以て、賞を與へらるゝ事となつたが、彼は固く之を辭して受けず、たゞ請ふに、日本に到着後成るべく上陸の便宜を得、日本の風習視察の機會を與へられん事を以てした。

ゴープル氏は斯くて上官の上陸に扈從して、日本の事物に接觸し多少得る所があつた、殊に日本に傳道するには先づ充分に己が教養を積まねばならぬ事を悟り、艦隊と共に一旦歸國し、ニューヨーク州ハミルトン専門學校に入學して福音宣傳の準備を取懸つた。

千八百六十年四月ゴープル氏は米國フレージャーバプテスタ教會の宣教師として神奈川に來着した。彼は至つて粗末な日本家屋に住みつゝ日本語を學び、傍ら傳道に努めた。二年の後横濱に轉じ、慶應三年長崎に往き暫く土佐侯に仕へ英語教師となり、或は翻譯に従事しつゝ布教に没頭した。後また横濱に歸り路傍傳道、文書傳道に當つた。神奈川に來着してから五年目に聖書の翻譯に着手し、福音書と使徒行傳までを完成し、その中出版になつたのは馬太傳文で、そ

れは明治四年の秋であつた。之が日本に於て出版された最初の聖書である。之より先獨逸人グツツラフは我漂流人より日本語を學び約翰福音書を譯し天保十年シンガポールで出版し、又ハンガリー生れのユダヤ人ベツテルハイムは琉球に來り路可、約翰兩福音書及び使徒行傳を琉球語に譯し千八百七十二月ウイヱナで出版した。

ゴープル氏が譯した聖書を出版するに當つて際會した困難は之を引受る板木屋がなかつた事である。當時基督教は國禁であつたから之に關する文書を版刻するは危険の至りである。横濱で之を引受る者がないので、東京に來り、基督教の文書たる事を告げずして二三の板木屋に分配して之を版刻せしめたと云はれてゐる。彼は此聖書を會ふ人毎に與へて愛讀を勤めて喜んだのも束間、其筋の脱む所となり、之を貰つた者は嚴重な取調を受け、其書冊は悉く沒收されてしまつた。此馬太傳は震災前まで横濱の某氏が珍藏して居られた。ゴープル氏の譯した讚美歌が遺つて居るが、それは英語讚美歌 *There is a happy Land* の譯で

よいくにあります たいそうえんぼう

しんじやさかえて ひかりぞ

とあり、今日一般に使用さるゝ基督教讚美歌集三百五十一番に

あまつみくには たのしきぞ

きよきともがら うちつどひ

と譯されてゐる。ゴープル氏の譯は至つて拙なものであつたが、兎に角之が日本語最初の讚美歌である。

ゴープル氏は傳道會社より支給さるゝ作給が極めて少額であつたから、赤貧洗ふが如く、常に負債にまはれ、病弱

な夫人をかゝへてつぶさに艱難を嘗めた。氏は病身な夫人の爲めに車を作り、自ら之を手押した。之が一般に用らるる人力車の型となつたと言はれてゐる。千八百八十九年米國バプテス傳道會社の月刊雜誌によれば、明治二年東京に於てゴープル氏は車の圖案作製を依頼され、其圖案に依つて作られたのが人力車と呼ばれるに至つたとある。

明治四年十一月特命全權大使外務卿岩倉具視、工部卿伊藤博文氏等の一行と同船して彼は米國に歸つたが、船中大使等の希望により、米國の事情、基督教の大意を説いた。明治六年二月再び渡來し、此年の十一月に『天道案内』を出版した。その後傳道會社を辭し、聖書販賣に従事し、其夫人が横濱で永眠後本國に歸り明治三十一年セント・ルイ市に於て永眠した。

## (二) 日本最初のバプテスト教會

明治六年三月横濱に於て日本最初のバプテスト教會が組織された。當時日本人中バプテストの信者は一人もなく、ブラオン博士並に其夫人、ゴープル氏並に其夫人の四人を成員としたものであつた。之が現今の横濱バプテスト教會の核心となつた。ブラオン氏は近世基督教外國傳道史に光彩を放つたウヰリヤムス大學の出身であつて、外國傳道の熱情に燃え、更に神學校に學び、始めビルマに赴き後アサムに轉じ千八百三十三年より同五十五年健康を害し止むを得ず歸國するに至るまで任地を離れず、新約聖書をアサム語に譯し、アサム語文典其他の著作を完成した。歸來後はバプテスト機關紙の主筆となり、十數年間筆硯に親しんだが、千八百七十二二年、日本に福音を傳ふるの必要を痛感し、其翌年夫人と二人の少女とを連れて、二月七日横濱に着いた。時に博士の齡は六十六歳であつた。彼は考へた「幸にして十年間生き存へて日本人に新約聖書を與へ、五十人の會員を有するバプテスト教會を横濱に創立するを得ば我が

業は徒勞となるまい」と。横濱に來着早々日本語を學び、聖書の翻譯を始めた。博士は語學の天才であつた、七十に近い老齡でありながら、來朝後五ヶ月の後『主の祈』を基礎として左記の讚美歌を作つた。

- 1 てんにましますわう われらのちよ
- みなをあがめて たふとませたまへ。
- 2 みまつりごとを よにのぞませよ
- てんになるおんむね ちにもなさしめ。
- 3 にちようのかてを さづけたまへよ
- われひとゆるせば われをゆるせな。
- 4 まどひにためし みるとなしに
- あしきよりわれを すくひてのがせよ。
- 5 みまつりごとよ わこうとさかえも
- みなかみにきせん よよまでもあめん。

博士は明治十二年七月新約聖書を完成し、八月一日新約聖書全體を印刷に附した。諸教派協同委員の手に成れる新約聖書の翻譯が発行されたのは其後の事であつた。博士は驚くべき努力家であつて、默示録の如きは三十七日間に譯了してしまつた。漢字は日本文化の進歩を妨ぐる事大なりと主張し、文字は意志を表記する符號に過ぎざれば簡單明瞭な假名文字を用ふべしとて、始めて假名文字のみで綴つたものを出版された。

東京に於けるバプテスト宣教師の最初の者はアール氏夫婦であつた。兩人は明治七年六月東京に來り、知合であつた森有禮氏(米國公使、後文部大臣)の好意により徳川町十二番地なる同氏の邸内に住む事になつたが、暫くして健康を害し、更に森氏の所有地たる駿河臺鈴木町に轉じ、明治八年女學校を開いた。當時外國人が居留地外に住居するは禁ぜられてゐたから、アール氏は森氏に備はれて此女學校に教鞭を執ると云ふ名義であつた。此女學校は駿臺女學校の前身であつて、東京に於ける女學校の最古のものゝ一であつた。

駿臺女學校は明治八年末米國より來着せるミス・キダー女史の創設にかゝる。女史は東京に於ける女子教育に先鞭をつけた功勞者である計でなく、基督教婦人矯風會の創設者であつた。矢島母子女史の談に「明治十五年に横濱で教會の集會が開かれ、各派の牧師信徒が集つて、數日に亘つて御相談があつたので、私も他の婦人方と傍聴にゆきました。或時キダー先生は私共に婦人が斯うして傍聴ばかりしてゐても利益がないから、他の場所で集會の爲めに祈つては如何でせうとの御忠告の下に婦人祈禱會が催され大に益を得ました。之が京濱婦人祈禱會の始めとなりました。其後キダー先生は私共に此府内にある醜業婦をして何とか正業に就かしむるやうな工夫はありますまいかとの御話でしたが、之は仲々重大な事でありませうから、私は大に躊躇致しました。すると先生は熱心に、神の爲し給ふ業であるから必ず出來ると申され、コリント前書十五章の終「爾曹貞固して搖す恒に勵て主の工を務めよ、そはなんぢら主に在て其行とこの勞の徒然からざるを知らばなり」を讀まれました。私も之に感激して其説の通り何かして醜業婦を正しき者にしたいと思立ちました。今日大久保にある慈愛館は先生の發言によつて成つたものであります。」とある。

### (三) 東京第一バプテスト教會の創立

東京第一バプテスト教會が七名の會員によつて設立されたのは明治九年十四日(日曜日)駿河臺アール氏宅に於てであつた。その七人のうち今生存して居らるゝは内田はま女史八十一歳であつて現に仙臺尙綱女學校令監を勤めて居られる。女史が浸禮を受けたのは明治八年十一月神田川即ち水道橋と御茶の水との間で、高い土手を百七十尺下つた處に於てであつた。日本婦人として浸禮を受領した者の第一人者は女史であつた。

此年横濱に於て川勝鐵彌氏はブラオン博士より受浸し、鳥山正信氏(内田女史の兄)はテーサー氏より受浸した。鈴木任氏が受浸したのも此頃であつた。此三氏は横濱に於て、或は東京に於て、或は神戸、下關等に於て永く牧師として初代バプテスト教會の爲めに盡された邦人の主なるものであつた。

### (四) 地方に於けるバプテスト教會の勃興

東北に於けるバプテスト傳道の開拓者はポート氏であつた。氏は大學豫備校教師であつたが、日本青年の精神的指導に當る事の教育事業に従事するよりも更に急務なるを感じ、教師の職を辭し身を傳道界に投じ米國バプテスト傳道會社の宣教師となり、横濱に定住し、時々地方に出張布教に當つた。氏は自由に日本語を使用され、自から説教をせられた。氏の努力の結果盛岡市にバプテスト教會の組織されたのは明治十三年一月であつた。同七月には仙臺に、十一月には花巻に教會が創立された。其後ジョンズ氏らが仙臺に定住するゝに及んで宮城、岩手、青森三縣下の著名な都街に盛んに布教の手が擴げられた。

神戸バプテスト教會は明治十五年に設立されたが之は前米國判事であつたリース氏が宣教師として來任せられたのに起因する。其後二三年にして神奈川縣下長後、兵庫縣姫路に教會が組織された。茨城縣水戸にクレメント氏が水戸

中學英語教師として赴任されたのは明治十九年であつた。之が水戸バプテスト教會の誕生の因となつた。信州に於ける開拓傳道はC・K・ハリントン博士に負ふ所が多い。

(五) アイヌ人傳道の爲め渡來せるカーペンター氏

明治十九年九月十七日O・H・カーペンター氏夫妻はアイヌに傳道する目的を以て北海道根室に來た。氏はハーヴァード大學を出て、ニュートン神學校卒業後宣教師としてビルマに在る事十八年間であつたが、遂に健康を害し本國に病を養ふ事五年、醫師の勧めに従ひ熱帶國に往くを止め北海道を選び自給宣教師として來たのであつた。來着後直ちに日本語の學習、土地の買入れ、建築の計畫中再び健康を害し翌年二月二日愛妻を異境に遺して此世を去つた。永眠の一時間前、當時北海道開拓使吏員であつた波岡末五年氏ら十二名の志道者を枕頭に招き伊吹農學士の通譯により次の悲壯な告別の辭を述べられた。「私は米國で大學と神學校の教育を受け、ビルマに渡つて數年間傳道に従事した。然るに熱帶地の風土病に罹り己むなく歸國するに至つた。休養中開拓使御備ライマン氏の報告書を読み、日本帝國北海道にアイヌ人あり、無智蒙昧にして憐むべきなりとあるを知り、同情の念禁ずること能はざるを覺へた。思ふに氣候も余が生國と同様なれば此アイヌ人種に傳道せんと目的を以て此地に來た。然るにアイヌには文字なく布教困難なるを悟つた。時に日本人にして眞の神を知る者稀なれば、此人々に傳道すべしとの勧めを受け、其言に従ひ、此地に留り今日に及んだ。然るに病氣再發起つ事は能きない、一週間後には神の御許に往かんとして居る。余は幸福である。何となれば余の終生の目的は神の國に於て基督と共にあらんことであるからである。たゞ遺憾なるは最愛の妻を遺して天に先だつことである。彼女は言語に通せず、又友もなし、願くば明年弟の來るまで、彼を擁護せられよ。諸君も

確く基督を信じ我住所に來られよ」と一人一人告別の握手をなし、共に讚美歌を唱ひ、共に祈禱を捧げた。其輝ける顔、其美はしき信仰に感激し、彼らが志道の念はます／＼進み其うち信者となり或は傳道者となつたものもある。憲政會の重鎮小池仁郎氏の如きは其生存者中の一人である。其後根室には夫人の弟バーシュレー氏並に其妻其他ミス・カンミンクス、ミス・カーペンターなど數多の宣教師が送られたが其俸給傳道費などは皆故カーペンター氏の遺産の所得を以て支辨せられたのであつた。

(六) 瀬戸内海の傳道——福音丸

今から三十數年前の事であるが、グラスコー市の富有なる一婦人が世界漫遊の途上瀬戸内海を航海して神戸に向つた時、多數の旅客は甲板に出でて内海の景色の美を眺めつゝあつたが、此婦人は更に其眼を嶋々の住民に向け、其精神的饑渴の有様を洞見し、福音傳達の必要を感じた。此婦人は琉球人傳道の爲め數年來資金を提供しつゝあつたのであるが、此後内海傳道の志を起し其計畫中に遂に永眠せられた。其後遺子ロバート・アレン氏は母の志を繼ぎ其記念として傳道用の小帆船福音丸を提供せられた。現今の福音丸は第二福音丸であつて百六十四噸百二十馬力の發動機を備へ、一時間九海哩の速力を有するものである。獨逸に於けるバプテスト神學校教授にして牧師である人を父とせるピツケル氏を船長兼宣教師として招き内海の島々の傳道に當らしめ、其成績も至つて良かつたが、日米問題勃發以來、其船籍の米國にあるが爲め、自由に航海するを禁ぜられ、今休止中なるは残念の至りである。

(七) 米國南部バプテスト外國傳道會社の日本傳道

千八百六十年(萬延元年)南部バプテスト外國傳道會社はローラー、トイ、ジョンソンの三青年を宣教師に任じ

た。ローラー夫妻は其年八月三日紐育より出帆して日本に向つたが、其船の消息は杳として絶えた、多分魚腹に葬られたのであらう。他の二名は其翌年米國に起つた内亂に妨げられ渡米を見合せた。其後明治二十二年に至りマコラム、ウワン、續いてメナード氏其他の宣教師を送り主として九州地方に傳道を開始した。

#### 教會の現状

全國に散在する教會の數七十二であつて、近來獨立自給の精神が盛になり、既に之を斷行せるもの十七ある。外國傳道會社は將來宣教師を送る必要をあまり感じてゐない。現今傳道地を東部西部の兩年會に分ち、前者は關東、關西、東北、島嶼の四部會に屬する諸教會及講義所之に加はり、後者には廣島以西の諸教會及講義所之に加はる。沖縄に於ける諸教會はミツシヨンの都合上東部年會に加入してゐる。

#### 教育機關

仙臺に尙綱女學校、東京に幼稚園保姆傳習所、横濱に關東學院(神學部、高等學部—社會事業科、商科—中學部)、搜眞女學校、大阪に女子神學校、姫路に日ノ本女學校、小倉に西南女學院、福岡に西南學院(神學部、高等學部、中學部)を有してゐる。

#### 社會事業

東京に三崎會館ありて、夜學校、幼稚園、托兒所、診療所、人事相談、兒童遊園其他に當り、深川區内に其分館(深川會館)を置き本館と略同一の事業を經營してゐる。大阪にメード社會館あり、東京早稻田にスコット・ホールあり専ら早稻田大學生の爲め寄宿舎、社交、宗教生活の向上に資してゐる。青年女子學生寄宿舎としては四谷にバプテス

ト女子學寮があり、男子學生の爲めには小石川に學生寄宿舎がある。

#### 機關雜誌

機關紙『基督教報』(東京市四谷區南寺町四八同社發行)の外小石川教會より『榮冠』、横濱教會より『塔の光』、小倉教會より『生命』、大阪より『敬虔』、仙臺教會より『福音』、下關より『西部バプテスト日曜學校同盟』などの月刊雜誌が發行されてゐる。

#### 内外人の協力

自給教會の事業に關しては宣教師は何等の權能をも有してゐない。年會、部會にも宣教師は客員として列席し得るも採決には加はらない。併しながら傳道、教育の事業であつて、外國の好意に依るものもあれば、内外協同委員會を組織し(邦人六名外人六名)協力事に當つてゐる。外國宣教師によつて開拓された事業も今や其基礎成り、邦人中或は國內に於て、或は海外に於て教育を受けたる指導者、經驗と能力とを有する信徒も漸次増加しつゝあれば日本バプテスト教會一切の事業が全然邦人の手にて經營さるゝの日も遠くはあるまい。(終)

救世軍一班

山室軍平



目次

創立者大將ウイリアム・ブース……………一  
東 倫 教……………六  
海外の發展……………一〇  
社 會 事 業……………一五  
救世軍の教理及其の特色……………一九  
救世軍の現状……………三三

救世軍一斑

山 室 軍 平

創立者大將ウイリアム・ブース

「ブース大將は同じ時代に於ける最も著名なる一人物である、私の判断によれば、彼は現代宗教的組織者の最大なるものである、彼は十九世紀に於ける大なる指導者の第一人でなくば、少くとも其の一人であつた、彼は貧民の間に成功ある心霊的事業を行ふの主要條件は、彼等の社會的狀態を改善することゝ認めた、彼の著述、殊に又其の事業は、大多數同胞の悲惨なる生活に對し、社會的良心を喚起する上に、同じ時代の何人にも越えて、剴切であつた、彼の天才と、堅忍と、献身とは、信徒、不信徒の間に於ける、彼の事業に對する一切の讒誣と、嘲笑とに打勝つた、彼は其の勞苦の報賞として、人道の使徒中に數へらるべき、不朽の名譽を贏ち得たのである」とロイド・ジョージは評したのである。然らばウイリアム・ブースは果して、如何なる人物であつたらうか。

彼は西曆千八百二十九年、即ち我が文政十二年、四月十日を以て、英國ノツチンガムに生れた、彼の父は聰慧なる事務家にして、嘗ては相當の身代を起したこともあつたが、不幸にして此を失ひ、全く困窮の狀態に陥つた、彼ブースは斯る時に生れたのである。而も彼の十三歳の頃、其の父は早くも此の世を去つたのである。彼の母は、敬神の念

厚く、慈善の心に富んだ、精神の最も堅固なる婦人であつた。如何なる乞食も、其の家の門に立寄つて、何か貰はずに去つたことはないといはれて居る。斯くの如く、彼は貧しい、然し乍ら信仰の家庭に育ち、十四五歳の頃より、早くも或商館に勤め乍ら寡婦なる母を助けて働かねばならなかつた。彼が其の罪を悔改めて基督を信じ、罪赦されて、新に生れたりとの自覺を得るに至つたのは、其の十五歳の時であつた。其の出来事が彼の生涯に新しい生命を吹込んだものであるのみならず、あまねく世人を救に導くに至つたのである。其は郷里ノツチンガムのメソヂスト教會堂の裏手にある、日曜學校の教室に於ける出来事であつた。後年彼が當時を追懐しての物語に「其頃別段、將來に見込ありとも覺えぬ、一箇の少年が、其郷里の一小室に跪き、基督の教を呼び求め、之を已に得て、「ア、神よ此の上は余を用ひ給へ、如何様になりとも、將來唯聖旨の儘に用ひ給へ」と眞實を護めて祈る時、それが後に、何ういふ結果を見るに至るべきかは、誰も想像し得るものがなかつたのである。さり乍ら神は此の一少年の献身を受入れ、之を祝み用ひ、既に幾十萬人を其足下に連れ歸る器となし給うた。尙此上とも彼が感化の消滅しない前に、更に幾百萬人を救に導かせ給ふことか分りませぬ」というてある。

ブリスは基督の救をうくると間もなく、二つの大切な眞理を發見した。それは第一、救はれたる者は他人を救ふ爲に生くべき事。第二、殊に世の貧しき人の爲に力を盡すべき事、是であつた。彼は後日の演説中に「余は、兒童が生れると間もなく、種痘をなす如く、「新に生れる」と直ぐに、救靈の熱情を以て、種痘せられたものである。而してそれは、非常によく余が身に感じ、著しき効果を現した、即ち救靈の大熱は、余が血液の中に煮え返り、今も尙余が血管中に沸騰して居る云々」とあるは、此の間の消息を傳ふる者である。其の頃彼は重き熱病に罹り、一時は命に關る

かと心配した程であつたが、幸にして間もなく快方に向つた。彼の病中、其友人達は、全快の上は、來つて彼等の野外集會を應援して呉れるやうにと申込み、ブリスは又、喜んで之を諾したのであつた、一日十二時間の業務を終へては、數名の友人と共に、椅子をかついで、メドウ・プラッツの貧民窟に出かけて行き、代る／＼説教し、且つ願ひ且つ祈り求道心を起せし者は其邊に併受けし小さい家に連れて行つては、之が面倒を見たのであつた。「評論の評論」の記者ステッドが評して「歴史は此等の少年の名前を、傳へぬであらう。併し乍ら、彼等は英國の歴史に、幾頁となく、其功業を記録せらるゝ或人々に優り、大切な事業を爲した者である。何となれば彼等は救世軍を發明したるが故である、彼等にして若し、ブリスを起さなかつたならば、我輩は今日、救世軍の大將を見ずして、或はノツチンガム選出の一代議士、ウイリアム・ブリスを見て居つたかも知れぬ」と申したのは亦、一個の議論として聞くに足ることと思ふ。

ブリス大將は多く學校教育を受けた人でない。彼は多くの英雄豪傑と同じく自ら教育したるものである。殊に實地經驗の學校に於て、彼の生涯と其事業とに、最も益ある多くの課業を學びたる人物である。其と同時に彼は始終心がけ、有益なる書物を選択して之を読むことを勉めた人である。彼は朝晩、勤先への途上、手に書物を離さず、フキニー、スタンブ、カウエー其他有名な救靈者の著書、及びウエスレー、フレツチャー、スミス、ストーナー等十字架の諸名將の傳記類を読んで居つたといふことである。

ウエスレーン教會の牧師は、ブリスが非常に救靈に熱心する有様を見て、「寧ろ傳道師の候補者になつては」と勸誘したので、ブリスも其氣になり、先づ指定の醫師に就き、健康診断を受けると、「到底此體で傳道師になることは出来ぬ。若し強ひてなれば、十二ヶ月経ぬ間に墓に葬られ、神の前に出ては自殺の罪に問はれるであらう」とのこと故、

其話はそれ切り、立消になつて了つた。ブリス傳の一著者が此醫者の事を評して、「彼は儘かに直言の賜物を得て居つたる人である。併し乍ら預言の賜物は之を授かつて居なかつたに相違ない」といひたるは面白い説であると思ふ。千八百四十九年(嘉永二年)ブリスは年甫めて二十にして、故郷を立出で、倫敦に上ることゝなつた。彼は倫敦にても亦其故郷に居りたる時と同じく、或商家に勤め乍ら、暇さへあれば靈魂の救の爲に、熱心盡力して居りたる者である。此頃よりブリスは其の將來の方針に就て、色々思案を凝らさねばならなかつた。斯くて終に其屬する教會に向ひ、傳道師の志願をなしたのである。併し乍ら千里の馬は、未だ容易に伯樂に會ふこと能はず、「目下傳道師の入用なし」との理由を以て、斷然拒絶を受けた。彼は失意の餘り、一時は濠洲に往て、刑務所の教誨師にでもなり、時機の到るを待たうかと考へた。是は濠洲にては英國よりも、宗教家になることが容易いと云ふ話を聞いたからである。併し之は終に實行に至らずして止んだ。

千八百五十二年(嘉永五年)四月十日、ブリスが二十三歳の誕生日に當り、彼は終に全く其職業を擲ち、傳道界に入ることゝなつた。之は特志家の靴屋のラビツツといふ者があり、單獨にて其手當を支拂ひ、彼の志を成さしめたる結果である。當時ラビツツと彼との問答が至つて面白い。「貴君は凡そ幾程あれば、食つて傳道が出来ますか」「左様毎週十二志宛もあれば、パンとチースにて傳導する事が出来ると思ひます。」「何、十二志とな、何ぼう儉約しても、まさか十二志で食へるものではない。少く共二十志や、そこら無ては。」と。ブリスは即ち毎週二十志の手當にて、身を救靈の事業に委ねることゝなつた者である。彼は實にパンとチースへあれば足れりとして、救の軍を戦ひ得る人物である。かくてメソヂスト改革派の一傳道師として働くうち、スバルチング教區から招待せられ、凡そ十五ヶ月間滞在

した時の如き、スバルチング町のみならず、同じ教區内のスウインス・ヘッド・ブリツチ、及びケイストル等に於ても成功ある働をなし、殊にケイストルの如きは彼が最初に出張したる時には、會員の數僅かに三十五人にて、或二階で小さな集會を營んで居つたが、其の去る頃には、會員の數二百人に達し、可なり立派なる會堂にて、一定の集會を營む程になつた。而して未だやう／＼二十三四歳の一青年傳道者の、僅か一年半の間の事業とすれば、亦隨分目醒しき成功であると謂はねばならぬ。

千八百五十四年(安政元年)ブリスは更にメソヂスト新派に屬することゝなり、スバルチングより倫敦に出で、クツク博士といふ人の許にて六ヶ月勉強して後傳道者として受入らるべきことゝなつた。書生としての彼は不出來の方であつたかも知れぬ。併し乍ら集會に出て人を教ふ爲に働く一段になつては、それこそ師匠も先輩も傍に寄付くことの出來ない勢にて、毎會多くの改心者が起るのみならず、クツク博士の愛護さへも亦彼の説教に感じて、教を求むるといふ有様、博士も舌を巻いて「ブリス君、君には何も言はないから、唯やり給へ、やり給へ、余は唯君の上に神の祝福を祈る許である」というて居られた。クツク博士の熱心なる推薦により倫敦全體を受持つ牧師キルトン氏の副牧師となり倫敦に於て傳道することゝなつた。彼が始めて其將に大關係のある東倫敦の貧民窟を訪ひ、ベテスダ教會堂に説教したるは此時代のことである。其うち、ブリスがレバイバリストとしての評判は日増に高くなり、彼は遂に倫敦のみに逗留して居ることが出來ず、巡回傳道者として招かれてプリストル、ガルンゼイ、ロングトン、ハンレー、ゲーツヘッド、マンチエスター等の各地に、何れも一二週間宛の特別運動をなす様なことゝなり驚くべき多數の人が救に導かれたのである。

千八百三十五年（慶應元年）七月二日の日曜日、ブースは一二の有志家の招に應じ、始めて倫敦東部の貧民窟に入り、向ふ數週間の特別運動に従事することゝなつたのである。彼はホワイトチャツベル町のトーマス通にある友會派フレンドの墓地に一つの大きな天幕を設け、其の附近にて毎夜野外集會を営み、其より歸つて右天幕内の集會を催したが、改心者の起らぬ時はなく、時には一夜に十三四人も罪を悔改めたる如き例がある。而して隨分の惡黨が續々救はれたのであつた。ブースは其初、唯數週間の特別運動を營む積にて東倫敦に入りたるものである。然るに偶然の出來事によりて彼は其儘此地に腰を据ゑ、可憐なる無告の同胞を救ふ爲に働く覺悟を定むることゝなつた。其次第はかうである。或夜彼は天幕に於ての集會を終へ、家に歸る途中、不圖或る居酒屋の前を通り、そこに晝を欺く、明煌々たる燈火の下に、多くの勞働者、無頼漢、墮落婦人達が、打寄つて喧々囂々、且つ飲み且つ罵る有様を見たのである。此時彼は忽ち一大天幕に打たれた。噫々世界何れの所にか、復と此程の異教徒があらうか、又彼等に愈つて救を要する人民があらうか、神よ助け玉へ。余は此可憐なる同胞を救ふ爲に、殘る生涯を擲たねばなりません」と。乃ち急ぎ家に歸り身を安樂椅子の上に投げ出しつゝ、其夫人に言ふ様、「愛する妻よ、余は今にして始めて余が一生の運命を發見した。余は今始めて余が何の爲に生れ、又何を祈り求めつゝ、かくは今日迄世界を彷徨まはつて居たかと云ふことを發見したのである。余は此の告ぐるなきの窮民、罪人、極惡人を救ふ爲に生き、又死なねばならぬ。是は余の使命である。余は余自らをも、亦郷をも、一切を擧げて、皆之が爲に獻げねばなりません」と。之はブース夫婦が今日迄に得たる地位

も身分も、一切投棄て、再び新しき生涯のやり直しをするといふことである。其事業の困難にして、將來の見込の立ち難きは勿論、差當り親子八人の糊口の道をさへ、何うして立つべきか一向解らない事になるのである。併し乍ら夫人は更に其の夫を失望させる如き挨拶をしたかつた。却つて雄々しくも答へて、「貴君が若し眞に左様御感じになるならば、其通り決行なさるに如くはありませぬ。私共は嘗て幾度か生活問題を神に任せ、斷然所信に立ちたる覺えがあること故、重ねて同じ様な經驗をくり返すとも、決して苦しいことではありません」と申した。

ブース夫婦は神の爲に一切を擲つた。然るに思はぬ所に一箇の富める同情者が現はれ、ブースを助けて内顧の憂なく其働を進めしむることゝなつた。同情者とは誰か、代議士サムエル・モルレーは其人であつた。彼はブースが東倫敦に於ける、尊貴なる事業のことを聞きて、深く感ずる所あり、書面を以て其來訪を求め、事細かに尙も其の運動の現状、又彼が家族の有様などを問質したる後、手形にて多分の金を寄附し、碌々禮も言はさず、撈うて彼を送り還したのである。かくて尙引續き同じ天幕の中で働くことゝなつたが、一夜非常の大嵐で天幕は倒れ、帆布は切々に裂けて了つた。そこで止むなく其次の日曜は青天井の下に打集うて守ることゝなつた。其から漸く舊い舞踏場を日曜毎に借受くることゝなつた。其後玉突場又は博奕の合宿、バー、下等劇場等を手に入れ、斷然なく大集會を營む様につてから、一度に五六十の改心者が、舞臺へ上つて來て救の恵を求め、ブースの働は一層廣く世に知らるゝことゝなり、其進歩も著しくなつたのである。

最初ブースの目的は唯如何にせば多くの靈魂を速かに救うて之を神に獻げ、神の思召を行ふ爲にのみ働かし得べきかといふ一點にあつて、固より別に一箇の宗派を造らうなどいふ心はなかつたのである。従つて初の間は唯多くの人

★を救ひ、之を其最寄の教會に送ることのみ勉めて居つたが、左の二三ヶ條の必要は、終にブリスをして餘儀なくも、別派の運動を營ましむることゝなつたのである。

第一、改心者を教會に紹介しても行かぬ事。

第二、行つても教會にて十分世話をしてくれぬ事。

第三、改心者の中或る人々は、ブリスの働を擴張する上に、何うしても留め置いて、一緒に働かしむる必要のある事。

此の如きものが即ち、救世軍の前身なる「東倫敦傳道會」發生の事情であつた。

同年秋傳道會の第一回の報告書を公けにした。其の記録の一節に「東倫敦住民の肉體上及び靈魂上の状態は恐しきものである。他の都會の貧民窟は、如何程暗黒にして邪惡なるも、其の廣さに際限があり、いはゞ知慧と富との大海に取巻かるゝ一孤島の如き姿であれど、東倫敦の貧民窟は是、邪惡と犯罪と悲慘の大陸である。無數の住民の中、百中の一人も禮拜の場所に近づくかす、ホワイトチャペル町がけでも、毎安息日に、居酒屋に出入する者の數は、實に一萬八千六百人と數へられて居る。」東倫敦傳道會の彼等に對する運動方法は(イ)野外集會、劇場、店頭、室内等なるべく人の注意を惹き易き所か、又は殊に暗黒なる人民の住める邊りに説教すること、(ロ)戸毎訪問、(ハ)聖書、小冊子及び救贖的の文書を賣る聖書車、(ニ)聖書講義、(ホ)信者の集會、(ヘ)禁酒の集會、(ト)希望の組、(チ)雜書協會、(リ)讀書を教ふる夜學、(ヌ)日曜學校、日中の學校、貧民窟學校、(ル)讀書室、(ヲ)一片銀行、(ワ)パン肉類を給し或は小額の金を與へて、飢餓に迫る者、頼りなき病人等を助くる働、(カ)安値のスープ等。

最初から色々手分けをして盡したものと謂はねばならぬ。千八百七十七年(明治十年)斷然救世軍てふ名稱を冒し、嚴然たる軍隊の制度組織を採用するに至つた。其年の末に、或日ブリスは長男ブラムエル及び書記官レイルトンの兩人に助けられつゝ、其年の年報を認めて居つたが、段々口授して「基督教傳道會は即ち義勇軍なり」といふ一節に至り暫く思案したる後言ふ様、「否々我輩は神の軍隊の現役に在り、當然の義務を行ふものにて、決して義勇兵と呼ぶべき性質の運動をなすものでない」と乃ちレイルトンの肩越に、ペンを取て、今書いた許りの「義勇」の文字を抹殺し、代るに「救世」といふ文字を以てしたのである。是は偶然の出來事の如く見えたが、實は當時基督教傳道會が、日に／＼其の制度を改め、軍隊組織に接近しつゝありたる最中とて、人々は永く求め居りたる鏡前の合鍵を、偶然見出したるが如く、何れも其最も實際に相應しき好名稱を歓迎したのである。

救世軍といふ名稱に次で採用せられたのは、「大尉」といふ稱號である、是は烟突掃除人より起りて、成功ある救世者となりたるエライジヤ・カドマンがホイットビーの漁民に傳道中、最初に用ゐたる稱號である。即ち彼は一般の「船長」又は親方といふ様な意味にて、自分の事を「キャプテン」と稱へたのが、いつとなく救世軍中に傳播し、今度は陸軍の「大尉」といふ様な意味にて一般に採用せらるゝことゝなつたのである。ブリス大將の言に、「凡て成功ある改革の運動は、皆三つの時代を経過すべきものである。第一嘲弄の時代、第二迫害の時代、第三成功の時代である」と。詩人ハイネの言に、「絶大の靈魂あり、其思想を以て言語を發すれば、必ず又其處に觸碰ツツあり」と。救世軍は第一固陋なる基督教信者に、第二に救世軍の爲に不義の利益を失ふことを恐るゝ者に、第三には理解なき當局者に手酷き迫害を加へられたのであつた。其の草分の時代には、到る處石を投げられ、唾せられ水をあびせられ、打たれ、毆かれ、又は腐れ卵を投げ

付けられなどして居つたものである。救世軍人の仇返しをしない處につけ込んで、之に有ゆる迫害を加へたのである。所謂「骸骨軍」<sup>スケルトン・アーム</sup>にてふ亂暴人の團體の如きは随分入念の者にて、到る處太鼓を鳴し、行列を整へ、大道を練り歩き、野外にて救世軍退治の演説をなし、軍營を襲うて其軍人を傷くるなど、それは／＼執念き迫害を加へたものであつた。

千八百八十二年(明治十五年)中、救世軍人にして亂暴人の爲に蹴られ、打たれ傷けられたる數は、本營に知れた丈にて六百六十九人、内二百五十人は婦人、二十三人は兒童であつた。然も警察官、裁判官は亂暴人を差置き、救世軍人を捕へて監獄署に投じたものである。此等のことは後終に、貴衆兩院の問題となり、大監督テイツト、平民の政治家ジョン・ブライト等が大に同情を表した。英國以外にても佛蘭西、獨逸、瑞典、加奈太、到る處にて迫害を受けたが、瑞西最も酷しく、或る記者が「救世軍人は瑞西に於て絞首臺に登る外一切の迫害を受けた」と申したのは實際を穿ちたる言である。ステツドがいふ様「彼の反對者が年中絶えず讒誣誹謗を以て、其事業を吹聴しなかつたならば、彼と雖も、恐らくは今日の十分の一の働を成就し得なかつたに相違ない」とは、奇警なる觀察であると思ふ。

## 海外の發展

日向の高鍋を去る二三里の處に臥龍梅といふ老木がある。此梅の枝は五六間行つては、地に降て新しき根をおろし、東西南北に廣がつて、全體では數町歩の地面に幅つてゐるのである。救世軍の世界各國に膨脹したる有様は又此に似たる所がある。救世軍は其根本的の主義本領を曲げざる限り、力めて往々先々の人情に循ひ、其風俗習慣に同化して働くことを心がくるものである。殊に土着の人を以て土着の人を救ふことを本旨とするものである。日向の臥龍

梅の如く、到る處堅實なる事業の根をおろし、段々東西南北に其枝を廣げて行くことは救世軍の主義である。即ち歐米諸國、さては濠洲印度等に開戦したる歴史は、此大切なる主義の活ける註解の如きものである。

千八百七十九年(明治十二年)救世軍の兵士にてシルレーなる者が、其妻及び娘と共に費府<sup>ヒュッセル</sup>に移住することゝなつた。其娘といふは其以前暫く救世軍の中尉を勤めて居た者である。シルレーは或る製造所に出勤して生活の途に有附くと、直ぐに其の餘暇を以て、救世軍の働を始むることゝなり、南北戦争の時陸軍病院に用ゐたる家にて、其半分を鍛冶屋に、半分を厩に使用したる空屋を發見し、家賃が廉いものであるから、之を借入ることゝなつた。こんな小穢い所にて、米國人に神を禮拜させ様といふのは、随分無鐵砲なる計畫の如く見えた。併し乍ら救主基督さへ、生ると直に槽の中に置かれ給うたことを思へば、又米國の救世軍が厩の中に、其の産聲を擧げ得ぬといふ道理はなかつた。果然親子三人の者が、街頭にて野戦を營み、群集を誘うて歸つて、此の惡臭鼻を極く廢家の中で、悔改めて神に順ふ者が續々現はれ、反對迫害も亦引續き起つたに關らず、救世の事業は着々進歩するので、シルレーは間もなく更に一ヶ所の家屋を借受け、第二小隊を開き、其娘をして之を受持たしむるといふ様な有様、其と同時に一方に於ては、倫敦の本營へ向けて、速かに然るべき士官を派遣せられんことを請求したのである。此に於て翌千八百八十年の二月、ブリス大將はレイルトン少將をして一隊の士官を引具し、米國開戦の途に上らしむることゝなつた。此で第五年大會の時には、既に百六十三箇の小隊と三百四十人の士官を有し、司令官及び多數の士官は「白宮」<sup>ホワイトハウス</sup>にて其國の大統領より引見せらるゝに至つた。蓋し其の事業の國家、民人を益すること大なるを認められたるが故である。

シルレー一家族が米國にて活動を始めたると同じ頃、濠洲に於ては又、或日アデレイドの一教會にて、牛乳屋のゴ

アと建築師のサウダルスなる者とが落ち合ひ、談じ合つて見ると、何方も以前英國にて基督教傳道會の改心者である所から、一見舊知の如く、此濠洲にも基督教傳道會の支部を設けやうではないかといふ相談になり、乃ち其の希望を認めて、倫敦の本營に送ると、暫くの後返却が来て、「人と金と二つの者が無いから、今は其の需に應じ難い」といふことであつた。併し乍ら兩人は失望せず、却つて奮發し、一方には士官の路用に充つべき金を貯へつゝ、他方には取敢ず、兩人にて傳道會様の運動を開始し、多數の改心者を得て立派なる一小隊を形造ることゝなつた。之を聞いて、シドニーにも同様の働を開始しては呉れまいかと、依頼して來る者もあるといふ有様、今は遲延すべきに非ずと、重ねて書面を倫敦に送り、此度は士官の路用をも封入して申出たが、播理なる故、此時英國に於ては、サ、ラ、ンド大尉といふ士官が病氣にて、送者からは非、濠洲に轉地療養をなせと、勧められて後る所であつたので、乃ち直ちに同大尉をアデレードに派遣することゝなつた。是は千八百八十一年(明治十四年)の春のことである。かくする間其事業の進歩が著しいので、本營は翌年更にパーカー少佐を濠洲に遣ることゝなつた。少佐は内國本營をメルボルン市に置き盛に靈魂の救の爲に戦ひ、又一面出獄人保護、墮落婦人救濟等の事業に手を着けた。間もなく此事業の成績が見るべきものあり、政府は乃ち元刑事局に用ゐたる家屋を、申請許りの家賃にて、出獄人救濟所用に下渡し、別に婦人救濟所の爲には金一千磅を下賜した。是は政府が救世軍の事業を助くるの嚆矢にて、濠洲の政府は長く此善事業を認識するに敏なりしとの榮譽を擔ふべきものである。斯くて開戦後滿五年には小隊百七十七、士官の數三百七十七人、毎週開聲(機關新聞)の發行部數は七萬五千部に達したといふことである。

濠洲に次いで宣戰を布告せられたのは佛國で、是は千八百八十一年の三月、前大將の長女ガザリスと現大將夫人即ち當時のソーバル嬢、其他二三人の年若き女士官の一隊にて開戦したるものである。

印度に救世軍の入込みたるは千八百八十二年の夏のことである。是より先、印度生れの英人にてタツカーなる者あり、印度にて裁判官を勤めて居たが、英國の開戦にて、ブリス大將の「直言の人ナタン」といふ文章に感激する所あり、千里を遠しとせずして、倫敦まで態々救世軍を視察に参り其の結果終に職を擲つて救世軍に加はることゝなつたのである。斯くて彼は暫く萬國本營の法律顧問を勤めつゝ小隊の働を見習ひ、「ときこのまゝ」を賣つて歩きなどして、相當に實驗を積んだる後、此度は他に三人の士官を引連れ、印度開戦の大任を帯びて彼地に向ふことゝなつた。タツカー少佐は何でも異人種、外國人てふ城壁を撤し、自ら印度人の一人となつて、彼等の救の爲に盡さんことを願ひ、乃ち其の徒と共に洋服を脱ぎ棄て、歐羅巴風の生活を斷念し、印度人の如く住ひ、印度人の如く着又食ひ、跣足で熱砂を踏みつゝ福音を宣傳へて廻つたが、或時日盛の頃太く疲れて、大きな樹の蔭に横はり、暫し假睡をして息んで居ると、そこへ二三人の印度の紳士が通りかゝり、傍に寄つてつくづく彼の寝顔を見、寝姿を眺めて、終に其の軟かい足の裏が、破れて龜子カメコとなり、それへ砂塵が一ぱい入つて、さも痛さうになつて居る有様を見た時、一人の紳士は覺えず落涙したのである。而して言ふ様、「此人の宗教は、眞實の宗教でなくてはならぬ」と。彼が目醒むるのを待ち、其の教をうけて直ちに悔改め、基督の教に入り、やがて其のありし事共を郷里の人々に言暢すと、聞く人は何れも大なる感動を起し、間もなく其地方に一大覺醒が起り、數ヶ月間に千人近くの者が更生の恵を求むることゝなつた。

一八八二年には瑞典、瑞西及び加奈陀に、其翌年には南アフリカ及び新西蘭に、一八八六年には獨逸に、一八八七年には丁抹、和蘭、伊太利に、一八八八年には諸威に、一八八九年には白耳義、南アメリカ、芬蘭に開戦した。

其の日本に於ける活動を始むるに至れるは西曆千八百九十五年(明治二十八年)九月のことであるが、日清戦争に於ける日本軍の目ざましき勝利は、世界の人心を聳動せしめた。救世軍も是非東方の島帝國に開戦すべき筈ではないか」と、親切にブリス大將に忠告する者が幾人かあり、中には其の爲に資金を寄贈する者さへ現れた。大將はこれ全く神の指導のある所に相違な」と、祈禱と熟慮との結果、乃ち十數人の將校を選抜して、之に日本開戦の大任を授け、之を極東に派遣することとなつたのである。即ち、七月十四日の夜、倫敦のシチー・テムブルにて、新に日本に派遣せらるべき士官達の爲に、盛んなる送別會を営まれた。席上、大將は彼等に告げていたのである。「往いて其の人民を愛せよ。それが出来ないなら、宜しく本國に呼戻されんことを請へ。世界の眼は諸君に注いで居る。往いて戦ひ、苦しみを忍び、又亦また度涙を流さねばならぬ。しかも直ちに其の涙を拭うて、人々の中に出で往かねばならぬ」と。一行十四人は獨逸船ホーヘンゾーレン號に乗つて、其の年九月四日横濱に到着した。彼等の着早々、或新聞記者が其の司令官を訪ね、「救世軍が日本に於て採るべき今後運動の方針は如何」と問ふと、彼は言下に答へて、「それは日本人をして日本を救はしめよといふ、唯これのみである」というた。彼等は然うした精神にて、努めて外國人らしき感情と態度とを棄て、専ら日本人に適合して其の事業を行はんことを心がけ、何れも日本服を着け、日本食を食ひ、日本建の家屋に住んで働き始めた迄は可いが、餘り無理が過ぎた爲か健康を害し、餘儀なくも歸國を急がねばならぬものが多く現れたのは、是非もなき次第であつた。それにしても彼等のけなげな精神は眞に欽慕すべきものがあつたと謂はねばならぬ。

斯の如くにして救世軍は、次から次と、其の働を擴張して行つたのであるが、遂に今日では、八十二の國々及び植民地に血と火の軍旗を翻すに至つたのである。

## 社會事業

初めブリス大將の東倫敦に入るや、彼は所謂基督教團の眞中に住ひ乍ら、嘗て禮拜の場所に近づくかず、望なく神なき生涯を送る最下層の同胞を救はん爲に立ちたるものである。然るに彼の志望は空しからず、爾來引續き彼の許に來りて悔改むる者を見るに、多くは困窮民、犯罪人、無賴漢、墮落婦人等にて、百中の七十五人は年來一度も教會の關を跨ぎたることなき者、又其の二十五人迄は靈魂上のみならず、差當り肉體上に、相當の救護を與へずしては、立行かない人々であることを發見したのである。是は恰も彼が邂逅したいと希望したる膚合の人達であつた。唯一つ残念なことは、當時彼には未だ一向彼等を肉體上の窮乏より救ふ設備が無い爲に、往々氣の毒千萬なる人々をも、見過しにせねばならぬ場合に出會したることであつた。

さりとて既に身を投じて、社會の最下層にある同胞の友人たることを任ずるからには、朝から晩まで只説教ばかりして居た丈では埒があかぬ。饑をたる者には食を與へねばならぬ。凍えたる者には之に着物を着せねばならぬ。其他失業者の爲に口入をなし、病人の爲に施療の道を開き、又罪惡の腐れ縁に繋がれて、身動のならざる人々の爲には、其々の法をつけて、之を自由の人となしてやらねばならぬのである。是に於てブリス大將と其の補助者達は、集會の間々には、八方に飛廻つて、色々難澁なる人々を助ける爲に、周旋盡力して居たが、其うちには段々手分にて此等の運動を爲すの必要と、又便宜とを認めるやうになり、最初に先づ地窖組、屋根裏組、裏町組などいふ組を作つて、貧民町を訪問する手筈を定めたが、其の追々發達したるものが、即ち今の貧民窟女士官の制度となつたのである。又無



宿者を宿らす爲に、小さな合宿所を設けたのが、後の安宿、安料理店の卵となり、或る兵士の宅にて、少數の不幸なる婦人の世話を初めたのが、即ち今日大壯麗なる婦人救済所の種子となるなど、考へて見れば、如何にも不思議千萬なる發達をして來たものである。然し乍ら救世軍の社會事業が一足飛に、世界の耳目を聳動する大進歩をなすに至りたるは、實にブリス大將の名著「最暗黒の英國及び其の出路」が世に出たる千八百九十年の暮から後の事である。

「最暗黒の英國と其の出路」は前後二篇に分れ、前篇には主として、所謂最暗黒の英國の現況を叙し、後篇には専ら之を救済する所以の、主義と方法とを闡明したるものである。此書の命題は丁度其より少し以前出版になりたる、探險家スタンレーの「最暗黒の阿弗利加」に因みたるものである。スタンレーが言ふ所に由れば、阿弗利加の内地に一大森林あり、大きな佛國の半ばに匹敵するものである。そこには高さ十丈より十八丈に至る老樹巨木、幾億となく枝を交へて生ひ茂り、年中絶て日光を見ず、其邊に住む人民は身體の發育悪しくして、概ね皆侏儒であらう。彼等は森林以外に快活なる青天白日の世界あることを知らず、亦之を信ぜず、生涯唯雲霧と濕氣と、疫癘とに苦しめられつゝ生き存ふる者である。彼等は又人肉を嗜む野蠻人である故、スタンレーは其の從者の死したる時、彼等に見出されぬ様、屍を河に流したといふことである。

スタンレーの此の不思議なる探險談は、當時廣く世界の人心を動かし、殊に英國人を驚かして居たものである。然るにブリス大將は大聲疾呼して言ふ様、目を擧げて見よ、卿等英國人の脚下には、最暗黒の阿弗利加にも愈りて、更に一層悲惨なる「最暗黒の英國」があるではないかと。かくて大將は、英國最下層の社會、固窮民の事情が甚だ彼の亞弗利加の大森林の様子に似たる所ある由を、一々事實に原いて證明したのである。其の大意にいふ、英國の貧民窟

にある人民は亦、絶て快活幸福なる天日を仰ぐこと能はず、困窮と統望と罪惡との中に煩悶しつゝ、生存へて居る者である。彼等は一人前の發達を遂げ能はざる侏儒である。彼等は人生の落膽の沼に踏込んで、終生足を抜くこと能はざる者である。彼等の間には又生きたる人間を喰物とする野蠻人が徘徊して居り、殊に多くの年若き娘等は、彼等の爲に罪を犯すか、餓死を待つか、二つに一つの窮境に陥られ、心ならずも恥づべき罪惡に陥り、彼等の餌となりて、精神的に取殺されて居るのである。偶々此の如き最暗黒の社會を濟度せんとて、其中に踏入りたる者も、大抵は皆亦スタンレーに隨ひたる土人と同じく、其の陰鬱不快なる大森林の、餘りに際限なきに絶望して、中途で遁出して居る。然り最暗黒の世界は遙々赤道直下に行かずとも、現在脚下に横はつて居るのである。而して此最暗黒の英國に住む人民を濟度することは、誠に英國人刻下の急務ではないかと、是れブリス大將が、其の社會救済の必要を、天下に絶叫したる叫び聲である。大將は當時英國にて「我等に日用の糧を與へ給へ」といふ、至極無理のない祈禱の、實際に叶へられざる人々、又は之を叶へる爲に、悪魔に屬ける方法を假らねばならぬ人々を算へて、約三百萬人と見積つたのである。之を細別すれば、無宿者十六萬五千五百人、饑餓に迫る者百五十五萬人、養育院其他にて世話になり居る者十九萬人、入監中の者五萬六千三百三十六人、自宅にて救助を受ける窮民、精神病者等七萬八千九百六十六人、別に石犯罪人精神病者の繫累、及び無宿、又は饑寒とまでは行かざるも甚だ之に近き者等少く共百萬人、以上を合計すれば約三百萬人といふ勘定になる。即ち英國當時の人口三千一百萬に對する、約一割の困窮民である。そこで大將は彼等の事をば、「溺るゝ十が一の民」と名づけ、之が濟度に對して、天下に訴ふることゝはなつたものである。然らば彼は如何なる度合まで救護することを求むるものであるか、大將がいふ様「我輩の標準は極めて低いもので

ある。然もそれさへ實行が出来たならば、近世の最も不都合なる難問は解決せらるゝわけである。而して其の標準とは、即ち倫敦の馬車馬の生活である。若し倫敦市中の人通り繁き街にて、一頭の馬車馬が、疲勞の爲か不注意の爲か、又は性惡の爲か、其他何等かの理由により、大道の真中に倒れたと考へて御覽なされ、何故其の馬が倒れたかといふ詮議は、抑々後の話である。何は兎もあれ、先づ大切な事は之を引起すことである。馬の倒れたる理由が過度の勞働や營養不十分の爲ではなくて、全く馬自身の過失に由て、其膝を折り、又は車軸を碎きたるものとした所で、其の吟味は此場合になすべき事でない、少くとも往來を塞いで、通行人の邪魔をしない爲になりとも、之を引起さねばならぬ筈である。次に倫敦の馬車馬は凡て左の三つの物を備へて居ることを知らねばならぬ。曰く夜眠るべき小舎、曰く胃腑を充すべき食物、曰く食物を贏ち得べき職業、即ち大將は、凡て人生の途上に行倒れたる貧苦窮乏の同胞を助け起し、少く共馬車馬同様、之に相當の住家と食物と職業とを與へん事を所望する者である。嗚呼之は何人も皆同意せざる可らざる當然の要求ではあるまいか。

大將は先づ己が經營せんとする社會事業の大方針と見るべきもの七ヶ條を示した。(一)彼等が人生の戰場に失敗したる理由が、其の品行の惡しき爲である場合には、其の人物を改造するが何より肝要である。(二)彼等の零落したる原因が、其の惡しき境遇に身を置きたる爲である場合には、其の境遇を變更せねばならぬ。(三)此事業は大仕懸でなければならぬ。(四)又永續すべき事業でなければならぬ。(五)直ちに實行して効果を收め得べき働方でなくてはならぬ。(六)又一方に其の人を助けて他方に之を害ふものではならぬ。(七)一部の人の益を圖る爲に、他の部分の人々に大なる迷惑を及ぼさぬ仕懸でなくてはならぬ。

彼は此等の大方針の上に、其の「最暗黒の英國救濟」の大計畫を立てた。(一)市中植民。之は安宿、安料理店、授産場、職業紹介所等を設ける。(二)農業植民。之は田舎にて農業、牧畜其他の勞働に従事し、將來内地にて一戸を構へ、又は海外に移住するの下地をなさしむる所である。(三)海外植民。之は加奈太、南阿弗利加、濠洲等、土地廣くして人口少き所に、内地で過剩はる人民を移住せしめ、そこに有用幸福なる新生活を始めしむる計畫である。其他に向、貧民窟出張所、出獄人救濟所、婦人救濟所、落人探索部、貧民銀行其他様々の部門を造り、各部相應じて脱りなく多數の困窮民を、救助し様といふのが、雜と先づ「最暗黒の英國」救濟事業の筋書である。而して彼は愈々其の計畫を實行する爲、創業費として金十萬磅(我が百萬圓)又維持費として、自今年々三萬磅を與へんことを、英國の社會に要求したのである。

之は随分少からざる要求であつた。併し乍ら英國人は、神が大將を用ゐて尋常ならぬ不思議を行ひ給ひたる事實を見、彼を信じ、彼を援接して、其事業を爲さしめんとするに至つた。此くして彼の事業は着々歩を進め、英國のみならず、世界の各國に其の精神を以て、人々の要求に應ずる事業をなしつつあるのである。

### 救世軍の教理及其の特色

次に掲げしは、救世軍が保持し又教へて居る、主要なる教理で、西曆千八百七十八年八月十三日、英國高等法院の登記課に於て、登記せられたものである。

一、我等は、舊新約聖書が神の感動に由りて與へられたること、また聖書のみが、基督者の信仰及び實行に關する神の法規たるこ

- とを信ず。
- 二、我等は、無限に完全なる獨一の神ありて、萬物の創造者、保持者、また統治者たることを信ず。
  - 三、我等は神の中に、父、子、聖靈なる三つの人格ありて、本質に於ては相分つ可らざるもの、權能と榮光とに於ては同等にして、唯是のみ、宗教的禮拜の眞の對象たることを信ず。
  - 四、我等は、イエス・キリストの人格の中に、神性と人性とが結合し居りて、彼は正しく眞個に神にして、また正しく眞個に人たることを信ず。
  - 五、我等は、我等の最初の父母が、罪なき者として創造せられたりしが、彼等の不順によりて、其の純潔と幸福とを失ひ、墮落の結果、凡ての人皆罪人となり、全く邪惡になり、また斯る者として當然神の怒を受くべき者なることを信ず。
  - 六、我等は、主イエス・キリストが、其の苦難と死によりて、全世界の爲に贖罪をなし給ひし故に、何人にも欲する者は救はれ得ることを信ず。
  - 七、我等は、神に對して悔改むること、我等の主イエス・キリストを信ずること、また聖靈によりて新に生るゝことは、救に必要なりと信ず。
  - 八、我等は我等の主イエス・キリストを信ずることにより、恩恵によりて義とせらるゝこと、また信ずる者は、其の裏に、まかし證を有することを信ず。
  - 九、我等は、聖書が、神の<sup>めづ</sup>殊恩の持續は、キリストに對する信仰と服従との持續によると教ふるのみならず、確實に回心したる人々が墮落して永遠に失はるゝこともあり得べしと教ふることを信ず。
  - 十、我等は、「全く潔く」せらるゝことは、凡ての信者の特權にして、「靈と心と體とを全く守られて、我等の主イエス・キリストの來り給ふとき責むべき所なき」に至り得ることを信ず。即ち我等は回心の後に信者の心の中に惡への傾向、或は若き根の殘存して、神の恩恵によりて抑壓せらるゝにあらずは、現實の罪を生ぜしむるものあり、然れど此等の惡傾向は、神の御靈によりて、全然取去らるゝことを得、また斯て神の御意に反する凡ての事より潔められたる、即ち全く潔くせられたる、全き心は、爾後

唯御靈の果をのみ結ぶべきことを信ず。また我等は、斯の如く全く潔くせられた人々は、神の能力によりて、瑕なく、責むべき所なくして、神の前に保たれ得べきことを信ず。

十一、我等は、靈魂の不滅、身體の復活、世の終の總審判、正しき者の永遠の幸福、及び惡しき者の永遠の刑罰を信ず。

以上に掲げたる信條を、各項に亘つて、詳細に説くことは、紙面に限ある故、之を略するであるが、唯一つ、是非共述べて置き度きは、救世軍に於て、特に聖潔の經驗を高調する一事である。全き聖潔とは、罪よりの完全なる救助を意味し、また凡ての才能及び力量、否其の全人格を、只管神の愛と其の御意とに献げられ居ることを意味するのである。聖書並に一般基督者の經驗は、救に際して行はるゝ内的變化は、偉大なるものなれども、完全ならざることを示して居る。回心せる人は、聖靈より、外側の罪を征服する能力を受ける。併し罪に對する感情及び欲望は尙ほ存在する、神の愛が其の心に注がるゝ、併し其の愛には、未練な、利己的の愛が混じて居て、未だ完全でない。其の主なる目的は神を喜ばせ奉ることである。然るに時には、自己を喜ばせるの方が盛になる。塵靈の臨在と助とを享有するとは云ふものゝ、御靈が何時も完全なる支配を得て居給ふ譯ではない。従つて其の靈魂の中に滿ち給ふことが出來ない。彼は神の御性質を受けた者となるのであるが、尙ほ神に似ない執着や傾向が殘存する。内在の罪、即ち惡及び利己に對する執着は、回心した人々の心にも尙存在し、若し神の恩恵によつて抑壓せらるゝのでなければ、動もすると、頭をあげて、現實の罪を造り出すものである。即ち單なる救は、惡しき行爲の湧き出づる源たる罪の性質を處置するものではない。どうしても更に第二の救即ち全き聖潔を受くべき必要がある。

聖書は、聖潔は之を求むる者に與へらるべきことを約束し、また神の民に聖からんことを命じ、聖潔を求むる爲の

祈禱を載せて居り、また之を奨励して居る。而してまた、己が民を其の罪より救ふことが、イエス・キリストの生涯と其の死との目的であつたと宣言して居る。

全き聖潔を得んと欲する者は、先づ其の必要を自覺し、凡ての惡と疑はしき事とを棄て、其の身を全く神に獻げ、神は其の約束に従ひて全く潔め給ふとの信仰を働かさねばならぬ。

全き聖潔は瞬間的に行はるゝ、而して聖靈によりて其の確證を與へらるゝのである。全く潔められ居る人は、たゞ神によりてのみ守られ、保たるゝのである。神は聖靈によりて、彼等の中に住み、彼等の生活の中に絶えず愈増し加はる御自身の榮光ある「果」を結ばせ給ふ。とは云へ、彼等は獻身と信頼とを續けることにより、また祈禱、聖書を讀むこと、證言、衷なる御靈の聲に従ふこと、また凡ての事神に服従することの如き、神の定め給うた心靈の成長の手段を用ゐることによりて、己の分を行はねばならぬ。これが救世軍の聖潔に對する信仰である。

申す迄もなく、救世軍は基督教の一團體である。其の特色とする處は、第一、其の心靈的なることである。即ち救と聖潔との二大教理を標榜して起ち、人が此の世ながらに全く罪から救はれて、神と偕なる生活、言ひ換れば、愛の生活を營むべきことを高調する。第二、其の實行的なることである。所謂救靈事業だけで満足せず、必要の場合には社會事業に迄も手を觸れるのは、全く之が爲である。第三、其の民衆的なることである。如何なる社會のどん底に沈んだ人でも、救世軍が兄弟として歓迎しない人というては無いのである。第四、其の進撃的なることである。あらゆる合理的の方法を採用して、飽迄進取的又戰爭的に世の罪惡と戦ひ、同胞を罪と禍とから救ひ出さん爲に盡瘁する。第五、又其の人道的なることである。救世軍は人種の差別を認めず、又男女間に優劣のあることを信じない。反つて

男も、女も、白哲人種も、有色人種も、貧も、富も、賢も、愚も、悉く同じ人間であり、神の前にはお互に皆兄弟であることを確信し、「凡て人にせられんと思ふことは、人にも亦其の如くせよ」てふ黄金律の實行せらるゝ代を來らせん爲に、夜を日に嗣いで健闘して居るのである。又救世軍は世界的の一大禁酒の團體である。嘗にアルコール性の飲料を用ゐぬのみならず、何處迄も禁酒を世に宣傳して止まないものである。

救世軍は又所謂聖禮典を守らない。何となれば、其の故に關する絶體的必要條件たるを認めぬが故である。此點に就て、聖書に基きて、我等の信ずるところを、詳述するは、長きに亘るを以て之を略するのである。

## 救世軍の現状

今最近の「救世軍年鑑」に現れたる、昭和元年末に於ける世界救世軍の状況を數字に示せば、次の如し。

- 一、救世軍の活動する國々及び植民地の數 八二
- 一、其の傳道用國語の數 五七
- 一、小隊及び分隊の數 一五、一四六
- 一、社會事業部の數 一、五四七
- 一、小學校の數 一、〇二五
- 一、海陸軍人ホームの數 三四
- 一、士官及び候補生の數 二二、二〇四
- 内 戰場 部 (即ち布教傳道の部) 一九、四〇二

社會事業部

三、八〇二

114

- 一、軍属の數 (士官にあらずして専ら其働に従事する者) 八、六三九
- 一、下士官の數 (大入部及青年部) 一〇〇、〇二〇
- 一、樂隊員の數 (大入部) 三三、二九七
- 同 (青年部) 九、五八九
- 一、唱歌隊員の數 五五、六五九
- 一、小隊候補生の數 三二、二四八
- 一、定時出版物の數 一二五
- 一、毎號の發行部數 一、九一三、一五一

別に社會事業部の内譯を掲ぐれば次の如し。

- 一、安宿兼簡易食堂 (男子) の數 一二七
- 一、安宿兼簡易食堂 (女子) の數 一四
- 一、簡易食堂の數 一五
- 一、労働寄宿舍 (男子) 一四九
- 一、女子労働寄宿舍 三九
- 計 三四四
- 一、男子授産場の數 二〇三
- 一、職業紹介所の數 一六一
- 一、免因保護部の數 一四

- 一、酒飲感化院の數 六
- 一、育兒院及び保育所の數 一〇六
- 一、女子授産場の數 一三二
- 一、産院の數 六五
- 一、農業部の數 一一
- 一、購保事業の數 一七五
- 一、病院其の他の社會事業部數 二八八

以上、救世軍の世界に於ける、其の傳道及び社會事業施設の數字に現れしものを列擧したのであるが、其の各部に於ける事業成績等、最近の報告を一々列記するには、紙面に限りあるを以て之を省き、左に少しく、日本に於ける救世軍の現状を記述して、此の稿を結びたいと思ふ。

救世軍の本營は、東京市神田區一ツ橋通町五番地にあり、大震災で其の建物を焼失したるも、神の不思議なる御導により、夙くに其の復興を見るに至つた。其の働き人を養成する爲の士官學校は、牛込區市谷本村町に在り、二十數年此を使用して來たのであるが、手狭で困るので、間もなく、市外澁谷町神宮通二丁目に倍程大な校舎を新築して、次の學期より、其所に移轉すべき手筈で、其の工事を急いで居る。目下全國に活動しつゝあつた士官の數は三百五十餘名にて、新學期に其の養成をうくる筈の士官候補生の數は百名である。救世軍の運動は大別して二つとすることが出来る。即ち一つは戰場部(又は布教傳道の部)今一つは社會事業部である。

戰場の部には、十一箇の聯隊と共に屬する百二十數箇の小隊とがあつて、北は北海道より南は九州、海を越えて南

満洲のあたり迄、其の所謂救の軍を戦うて居るのであるが、間もなく北は樺太に、南は臺灣に其の活動が開始せらるゝ筈である。各小隊には何れも之を受持つ小隊長あり、又之に屬する士官、兵士、少年兵がある。小隊では殆んど毎日缺かさず、會館又屋外にて集會を營み、大人の爲、青少年の爲、婦人の爲、公衆の爲、又は内輪の者の爲に、それぞれの催をする。よく整頓した小隊には、少年青年の爲め組會、日曜學校の外に、又義勇團、小隊候補生團あり、樂隊、唱歌隊の編成せられた處もある。しかも此等凡ての目的は、要するに人を罪から救うて、新しき生活に入らしむるにある。即ち人を基督に來らしむることによつて、生れかはつた人間とならしむる他にはないのである。

社會事業の事に就て、大體の御話を致したのであるが、紙面に限りある事故、今は列記する程度に止むるのである。

**救世軍療養所** 東京府下和田堀町に在り、大正五年創立、結核患者の療養所である。計七箇の病棟には百七十のベッド備へ付けあり、實費及び施療にて患者を收容し居り、去る十年間入院患者の延数は、計二十八萬七千五百人に達し、目下入院患者の数は百三四十の間を上下して居る。

別に下谷仲徒町にあつた救世軍病院は、大震災の爲に焼失し、今はバラツクで細々ながら其の事業を繼續して居るくらゐに過ぎぬが、淺草區北三筋町にこれ迄よりもすつと廣い地所を手に入れし故、金四十萬圓を投じ、前よりもすつと整頓した一病院を新設すべく、只今其の計畫を進捗中である。

**三ヶ所の労働紹介兼簡易宿泊所** 救世軍は東京市中に於て、最も早くから労働紹介、又労働寄宿等の事業に指を染めた團體である。現在三ヶ所の労働紹介、兼簡易宿泊所の事業を經營して居るのである。其一つは京橋區月島中

町に在る自助館にて、昭和二年中の宿泊者の数は、計二萬五千六百五十八人、今一つは府下三河島にあり、努力館と稱ふ。去る一年間の宿泊者總計二萬四千四百〇七人。今一つは、横濱市南吉田町に在る民衆館で、昨年一年間の宿泊總計三萬七千九百二十七人である。單に宿泊せしめ、労働の口を探すのみならず、行末身の立つ様に、之が面倒を見る必要がある。此うした目的で營む折々の集會と又受持士官の個人的接觸とは、此の事業に於ける最も重要な部分と見ることが出来る。

**釋放者保護、勞作館** 日本に明治二十年代から存在した釋放者保護事業は、十指を屈するに足りないさうであるが、救世軍の「勞作館」は其の少數の釋放者保護事業の一つに屬する。牛込區赤城下町にあり、餘り多く此の種の人を一緒に置くのは宜しくない故、大概十四五名位づゝを收容して、毎日外部へ何かの労働に出すなり、内に留る者には、袋張などの仕事をさせて居る。毎週數回宗教的集會を營み、其の改過遷善の爲に盡して居るのである。

**娼妓自由廢業と救世軍** 救世軍と娼妓自由廢業との關係は、今日四十歳以上の人で、幾らか之を知らない人は少いであらう。明治三十三年、此に着手したのであるが、非常なる迫害が起り、幾度となく半殺にせらるゝやうの目に會つたのである。其うち娼妓自由廢業が法規の上から公に認めらるゝこととなつた結果、最初の一年半の間に、日本全國にて娼妓の數を減ずること、實に一萬二千餘人に及んだ。これは早や二十七八年前のことであるが、救世軍は引續き、藝娼妓、酌婦等不幸なる婦人の救護に根氣よく盡瘁しつゝ、今日に至つて居るのである。其の今日迄に救済せし婦人の數は、實に四千を越えて居るのである。昨年三月よりは、特に此の種の婦人を引取つて世話をする爲に、「光の家」と名づくる一ホーム（不幸な婦人の隠家）を設け、其處に收容することとなつた。最近までに其所に引取られ

た婦人の数は約百名に及んで居る。

**東京婦人ホーム** 麻布區廣尾の東京婦人ホームは、明治三十三年以來の事業にて、今日迄諸種の不幸なる婦人、又は虐待兒童等を引取り、之が世話をしたこと、數へられぬ程多く、此處から出て今は立派な家庭の人となり、幸福に日を送つて居る者も何百人といふ程にて、昨年中收容者の延數は八千四百九十八人、年末の現在數は二十六人であつた。

**少年の保護、希望館及び女子希望館** 大阪市に救世軍の社會事業が二つあり、どちらも少年審判所から少年を引取つて、之を矯正感化教育する爲に設けられたのである。其の男子部を「希望館」といひ、女子部を「女子希望館」と名づく、希望館は港區泉尾町にあり、去る一年間の成績は、新受託者六十三名、再收容者十六名、計七十九名。何れも手數のかゝる青年であるのは言ふ迄もないが、好結果で家族親戚に渡した者、就職した者等、何十名かあるのは喜ばしい。毎日家庭の祈會を営み、學課を授け、作業をさして居る。女子希望館は北區野田に在り、其の收容者は前同様何れも少年審判所を経て來た者で、掛りの者の骨折は一通りでない。通常十數人位の少女を收容して居る。此位が一番感化をするに都合の好い數だからである。

**本所の社會植民部** 本所區柳島梅森町に、救世軍の「社會植民部」といふのがある。此處では兒童の保育所を營み、毎朝八九十名の兒童を、勞働に出かける母親から預つて、一日其の世話をして居る。大正十四年以來、昨年末迄にこゝに來た兒童の延數は六萬五千七百八十八人に達する。去年の夏は千葉の海岸に二週間、臨海保育園を開き、百十餘名の兒童や母に、轉地休養の便宜を與へたのである。又毎週三夜、三十名程の小學兒童の爲に夜學をなし、毎週

一夜近所の娘達の爲に編物を教へ、他の一夜は英國婦人士官が出張して英語を教へて居る。又特別に任せられたる女士官が、こゝを中心に年中最寄の家々を訪問し、病人の介抱や、内職の世話、家事の相談相手等、所謂スラム・シスターの働をして居る。こゝでは又日曜學校、母の會、救護會等を催し、廣く周圍の人々に宗教的感化を及ぼさんことを力めて居るのである。

**人事相談部と警察刑務所掛** 去る一年中本管内にある人事相談部にて取扱うた事件は一千六百九十件にて、随分入組んだ難問題もあり、此方の忠告一つで生死を定めようといふ如き、切迫詰つた事情の人々も少くなかつた。しかも其等の人々が、精神的に實際的に、相當の解決の鍵を授けられて歸つて行つたのである。又警察及び刑務所を訪問して居る女士官が取扱うた件數は（重に婦人）七十二であつた。

**年中行事の社會鍋** 救世軍の「社會鍋」は、今では各市の年中行事となつた。東京では極月二十七日から三十一日の間に、雑煮餅の廉賣を行ひ、代價一圓の餅を五十錢に賣つて廻るわけである。これは貧しい人々に十二分の便宜を與へつゝ、其の自尊心を傷けない爲の仕方だ、行く先は下谷、淺草、本所、深川、小石川、麻布の一部、板橋、和田堀、龜戸、三河島、吾儘、日暮里、尾久、王子等にて、約七八千戸を賑はすのである。其他大阪、横濱、名古屋、京都、神戸等を始め、北海道から九州までに亘り、三十三ヶ所程の都府で餅廉賣、若しくは配給を行ふのである。

其他昨年末は、深川猿江裏町の善隣館内にて、歳末臨時救護運動を行ひ、三千人の患者を取扱ひたる如き、或は東京市中各所の水上生活者約三萬にクリスマス・マスの贈物を贈つた等、又は北丹の大震災に對しては、京都大阪の救世軍人達が逸早く出張して、日用品の配給をなし、臨時保育所を開き、三千人にせんざいの御馳走をするなど、絶えず其時

々に應じて必要なる運動を試みつゝあるのである。(完)

三  
字  
訂  
正

發行所 株式 東方 書院	不許複製	昭和十年三月十三日印刷 日本宗教叢書 昭和十年三月廿八日發行 第十四回配本
東京市小石川區久野町一〇八	編輯發行 兼印刷人	東京市神田區一ツ橋通町二
共同印刷株式會社	株式 東方 書院	代表者 三井品史
代表者 君島 隆	印刷所	
電話九段三八四二 特東京六八六一一		



終